東方學報 京都第90冊（2015）：320-277頁

トハーリスターン行政地理研究序説

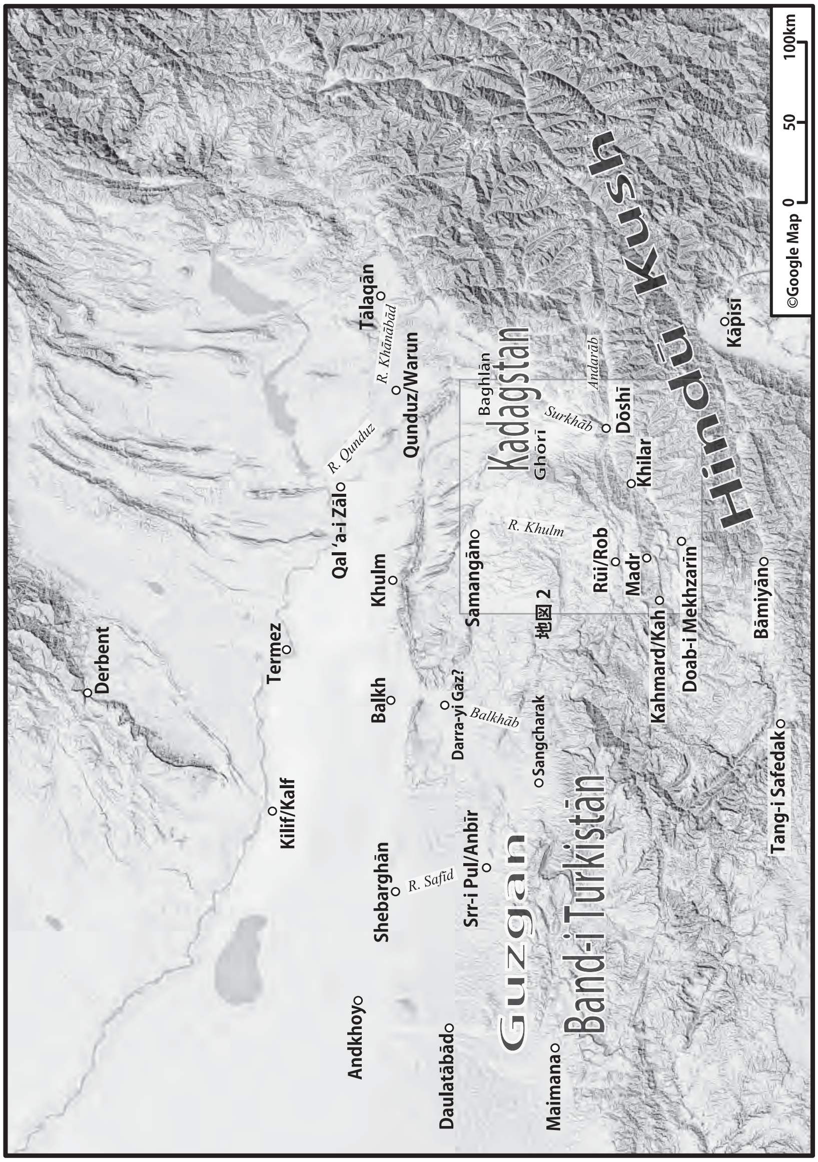
宮　本　亮　一

は　じ　め　に

現在のアフガニスタン北部，ウズベキスタン南部，そしてタジキスタンの南部に当たる地域は，かつてトハーリスターンと呼ばれていた。中央アジアに巨大な版図を形成したクシャーンとエフタルは，この地域に１つの拠点を置いた。また，本論で少しく述べるように，サーサーン朝も一時期この地を強い影響下に置いていたと考えられている。つまり，イスラーム化以前の中央アジアに展開した諸勢力の政治的動向を考える場合，トハーリスターンという地域の重要性を常に念頭に置いておかねばならないのである。また，トハーリスターンはユーラシアの各地を結ぶ交通路が通過していたことから，交通の要衝として地理的に重要な地域でもあった。すなわち，中国方面から見ると，タリム盆地を抜けてパミール高原を越えた道が，トハーリスターンを通過して西方へ向かうと共に，南アジア方面から西北インドを通過し，ヒンドゥー・クシュ山脈を越えた道がこの地域を通過し，さらにソグド方面へと向かっていた。さらに，それらの交通路を通じて各地の文化が伝播したことを考えれば，トハーリスターンは文化史的に重要な地域であったと言うこともできる。

しかし，このような重要性とは裏腹に，当地域の歴史や社会の様子を伝える資料は極めて少なく，前世紀末までは，漢文資料やイスラーム文献の記述からわずかな情報を引き出し，それに基づいて研究を行うほかなかった。ところが，戦乱のアフガニスタンから新たな３つの資料群が発見され，このような状況が改善されつつあることは，今や広く知られているところである。それらの資料とはすなわち，紀元前４世紀のアラム語文書群，４世紀から８世紀後半のバクトリア語文書群，そして８世紀のアラビア語文書群である[1)]。これらの資料から得られる情報を基に，先行研究の見直しを行う必要があること

1）　アラム語文書群については，S. Shaked による予備的な考察があり，写真を含むテクストと↗



地図１　トハーリスターン全域図

↘ 翻訳も発表された［Shaked 2004 ; Naveh & Shaked 2012］。バクトリア語文書群については，N. Sims-Williams によって概説，テクスト と翻訳，写真版，人名研究が発表され［Sims-Williams 1997 ; idem 2012c ; BD1 ; BD1^2 ; BD2 ; BD3 ; Sims-Williams 2010a］。そして，アラビア語文書群については，G. Khan による写真版を含むテクストと翻訳が発表されている［Khan 2007］。

は言うまでもないが，それと同時に，新出資料を利用し，未開拓分野の研究にも取り組まねばならないだろう。

そこで，本稿ではバクトリア語文書を利用し，これまで考察されたことのないトハーリスターンの行政区画構造について，若干の考察を行いたい。古代中央アジア，とりわけヒンドゥー・クシュ山脈をまたぐ地域の歴史の解明に多大な貢献をしてきた桑山正進の一連の研究を見れば明らかな通り，研究対象となる地域の地理的状況を理解することは，政治史であれ文化史であれ，あらゆる研究の基盤となり，またその研究の確実性を高めることにもなる。本研究を行う理由はまさにこの点にあり，トハーリスターンにおける地理的状況の理解をわずかでも深めることが，当地に展開した諸勢力の動向を解明することに繋がると考えるからである。

しかし，新たに発見されたバクトリア語文書は150点ほどであり，その数は決して豊富とは言えず，そこから得られる情報は断片的である。よって，バクトリア語文書を通して見えてくる当地域の行政区画構造にも不明確な部分が多い。それでも，漢文資料や新出のアラビア語文書など関連する資料を援用することで，バクトリア語文書から得られる情報を有効利用し，研究を行うことは可能である。

本稿の主たる目的は，トハーリスターンにおける行政区画構造を明らかにすること，および当地を支配した勢力の統治機構と在地の行政区画との関係を考察することである。まずは，行政区画についての具体的な考察に先駆けて，トハーリスターンという地域名が指し示す範囲について考察し，バクトリア語文書が書かれた地域の地勢を確認することから始めたい。

I　バクトリアとトハーラ/トハーリスターン

1　地域名と指示範囲の変遷

トハーリスターンという地域名が指し示す範囲は，時代や資料によって異なり，明確に定義することは難しい。文献資料に初めて現われたとき，この地域はバクトリアと呼ばれていた。すなわち，アケメネス朝のダレイオス1世（前522～486年）の事跡を記した古代ペルシア語の碑文には，彼が征服した地域や彼の治世に反乱を起こした地域の名が記されており，そこにbāxtri-「バクトリア」の名が現れる[2)]。

しかしながら，ダレイオスの碑文に見えるバクトリアという地名が指し示す範囲を知

2）　最近になって，種々のイラン語資料に見えるバクトリア/バルフという名称についての言語学的研究が発表された［de Blois 2013］。

ることは難しい。例えば，ダレイオスのビーソトゥーン碑文には，彼に服従した地域として，バクトリアと並んで suguda-「ソグド」，gandāra-「ガンダーラ」の名前が挙げられ，また，彼の治世に反乱を起こした州として margu-「マルギアナ」の名が挙がっている［伊藤 1974：23，35; Schmitt 2009: 39, 65］。このことから，バクトリアの北にソグド，西にマルギアナ，南にガンダーラが位置していたと考えることはできるが，これ以上詳しい情報を得ることはできない[3)]。

その後，アケメネス朝を滅ぼしたアレクサンドロス大王（前356〜323年）は，その東方遠征の途上，前329年にバクトリアへ到来し，その年のうちにオクサス川（アム・ダリア）を越え，ソグドにまで到達する。アレクサンドロス大王の事績を伝える文献には，大王の通った行程を詳細に記しているものがあり，それらの記述には，当時のバクトリアという地名が指し示す範囲を知る手掛かりがある。

アッリアノスの『アレクサンドロス東征記』によれば，アレクサンドロスは，東方に逃れたアケメネス朝のダレイオス3世（在位，前336〜330）を捕え殺害したバクトリア総督（サトラップ）ベッソスを追い，カウカソス山を越えてバクトリア地方に入ったとある［大牟田 1996：本文篇 445-449］。同様にクルティウスの『アレクサンドロス大王伝』，およびディオドロスの『歴史文庫』も大王がカウカソス山を越えてバクトリアに到着したことを伝える［谷・上村 2003：261-262，266-268；森谷 2011：157］。これらの文献でカウカソスと呼ばれる山について，アッリアノスは，マケドニア人が，アレクサンドロスがカウカソス山（すなわちカフカス山脈）を踏破して勝ち進んだと大仰するために，現地で「パラパミソス」と呼ばれていた山をわざわざカウカソスと呼んだと述べている［大牟田 1996：本文篇 591，599］。このパラパミソス山は普通ヒンドゥー・クシュ山脈に比定されている。ストラボン（前63〜23年頃）の『地理誌』に，パラパミソス山の南がインドであり北がバクトリアであると記されていること，およびプトレマイオス（83〜168頃）の『地理学』にもこの山脈がバクトリアの南限であると記されていることから考えても，この比定に問題はないだろう[4)]。すなわち，これらの諸資料に言及されているバクトリアと

3） 新出のアラム語文書には，バクトリアのサトラップと思われる Akhvamazda なる人物から，フルム（Khulm）で活動していた配下の役人 Bagavant に発せられた手紙が数点あり，その中にソグドの地名が見えることから，これらのアラム語文書が書かれた前4世紀後半，アケメネス朝の統治下で，バクトリアとソグドは1つの行政区画であったと考えられている［Naveh & Shaked 2012: 17-18］。

4） 飯尾 1994：II 433-434；中務 1986：108a。ストラボンもアレクサンドロス大王がこの山脈を越えてバクトリアに入ったと記す［飯尾 1994：II 434］。アレクサンドロスのヒンドゥー・クシュ山脈越えのルートについては，大牟田 1996：註釈篇 1678-1680 を参照。

は，ヒンドゥー・クシュ山脈以北を指すと考えることができよう。

では，バクトリアの北側についてはどうか。アッリアノスによれば，バクトリア侵入後のアレクサンドロスの行程は次の通りである。ベッソスは，アレクサンドロスがヒンドゥー・クシュ山脈を越えて迫って来たため，オクサス川を越えてソグディアナ地方のナウタカというまちへと退いたが，大王はそれを追って川を渡る5)。そして，ベッソスはバクトリア人のスピタペネスに捕えられ，アレクサンドロスに引き渡される。その後，アレクサンドロスはスピタメネスを中心にソグディアナ各地で起こされた反乱に対処して回った後，ザリアスパ（バクトラの別名か）へ引き返して冬営し，再度オクサス川を渡ってソグディアナへと向かう［大牟田 1996：本文篇 447-519］。

また，クルティウスによれば，ベッソスは迫るアレクサンドロスに対する軍議の中で，ソグディアナまで退却し，オクサス川を敵に対する障壁とすることを提案し，その後川を渡りソグディアナで兵を集め，アレクサンドロスもそれを追いオクサス川を渡り，ソグディアナの状況を知ったとある［谷・上村 2003：262-266，270-272］。これらの記述から，バクトリアとソグディアナの境界はオクサス川であったと考えることができよう。ストラボンは，オクサス川がバクトリアとソグディアナの境界であると度々述べており，プトレマイオスも同様である［飯尾 1994：I 131，II 63，71；中務 1989：108］。

以上のように，アレクサンドロスの事績を伝える諸資料からは，当時のバクトリアという地名が指し示す範囲の北限をオクサス（アム・ダリア），南限をヒンドゥー・クシュ山脈と捉えることができる。

アレクサンドロスの東征後，この地域はセレウコス朝の領域に入るが，バクトリアの総督であったディオドトスが前3世紀中頃セレウコス朝から独立する［合阪 1998：433］。この王国は普通グレコ・バクトリア王国と呼ばれるが，この王国も前2世紀中頃，北方から侵入してきた遊牧民族によって滅ぼされることになる。この間のバクトリアという地名が指し示す範囲を知ることはできないが，この地名はその後用いられなくなり，この地域は北方から侵入した遊牧民族トハロイ（*Τόχαροι*）に由来すると思われる「トハー

5）大王の渡河地点に関しては様々な説がある［Cf. 大牟田 1996：註釈篇 1683-1684］。近年，ルトヴェラゼは，自ら行った発掘調査の成果に基づき，テルメズの北西 30 km ほどに位置するアケメネス朝時代の遺跡ショル・テパ辺りを大王の渡河地点とした［ルトヴェラゼ 2006：66-109］。ルトヴェラゼは，大王の渡河前の出発地と考えられ，アッリアノスがアオルノス（*'Άορνος*）という名で記すまちを，考古学的観点からバルフの北方にあるアルトゥン・ディリヨルテパという遺跡に比定しているが，このまちの名前を，紀元前4世紀のアラム語文書，そしてバクトリア語文書に見える Warnu という地名に比定する説があり，その位置は現在のクンドゥズ（Qunduz）と考えられている。詳細は註 36）を参照。

ラ」「トハーリスターン」の名で呼ばれるようになる。ストラボンによれば，ギリシア人からバクトリア地方を奪ったスキタイ諸部族の中にトハロイの名前が見え，ポンペイウス・トログスも，パルティアの王アルタバヌス（1世）がトカロイ族と戦ったことを記している［飯尾 1994：II 60；合阪 1998：439］。

漢文資料に見える大夏，吐火羅，吐呼羅，覩貨羅などは，このトハーラの音写であると考えられており，前129年頃，中央アジアに到着した張騫の報告に基づく『史記』大宛伝には，大夏は嬀水（オクサス：アム・ダリア）の南側にあったと記されている[6)]。続く『漢書』や『後漢書』の西域伝，『三国志』魏志烏丸鮮卑東夷伝の注に引く『魏略』西戎伝にも大夏の名は見えるが，その地理的範囲については記されていない［『漢書』：3891；『後漢書』：2291；『三国志』：859］。

その後，この地域は『魏書』（『北史』）西域伝に次のように記される。

> 吐呼羅国は，（北魏の都である）代から一万二千里離れている。東は范陽国まで，西は悉万斤国までであり，（東西の）間は二千里離れている。南は山脈までであるが，（その）名前は知られておらず，北は波斯国までであり，（南北の）間は一万里離れている。国には薄提城があり，その周囲は六十里であり，城の南に西向きに流れる大河があり，漢樓河という名前である。土地は五穀の栽培に適しており，質の良い馬・駱駝・騾馬がいる。その王はこれまでに使者を派遣し朝貢してきた。[7)]

ここでは，吐呼羅国の四至が記されているが，その一部に混乱が見られる。桑山正進は，従来，バーミヤーンを指すものの，その方角が誤っていると考えられていた東の范陽国を，『新唐書』に「苑湯州は抜特山城を以て置く」とある「苑湯」の誤りであると考え，これをバダフシャーンと見なし，四至のうち方角が誤っているのは北の波斯（ペルシア）と西の悉万斤（サマルカンド）であるとした［桑山 1984：128-129］。筆者は桑山の見解を妥当なものと考えているが，異見もある[8)]。しかしいずれにしても，ここで重要なの

6）『史記』大宛伝の当該箇所については，次章を参照。

7）吐呼羅國，去代一萬二千里。東至范陽國，西至悉萬斤國，中間相去二千里。南至連山，不知名，北至波斯國，中間相去一萬里。薄提城周匝六十里，城南有西流大水，名漢樓河。土宜五穀，有好馬・駝・騾。其王曾遣使朝貢。［『魏書』：2277；『北史』：3229］

8）É. de la Vaissière は，従来通り范陽をバーミヤーンとみなし，ここに記されている四至は，全て方角が誤っているとした［de la Vaissière 2010：215 n. 21］。范陽をバーミヤーンとみなす場合，資料では南と記されている山脈（原文：連山）が東にあったことになるため，de la Vaissière はこの連山をパミール高原と考えていると推察される。しかし，パミール高原は漢文資料中では「葱嶺」と記されることが多く，『魏書』（『北史』）西域伝の中にも多↗

は，アム・ダリア以北の地がトハーリスターンに含まれていることであろう。この点は，7世紀前半にこの地を訪れた玄奘の記録『大唐西域記』でも確認できる。

> 鉄門を出ると覩貨邏（トハーラ）国〔以前は吐火羅国といった。これは誤りである〕の故地に達する。南北千余里，東西三千余里ある。東は葱嶺（パミール）がふさぎ，西は波剌斯（ペルシア）に接し，南は大雪山（ヒンドゥー・クシュ）があり，北は鉄門に拠っていて，縛芻大河（アームー河）がこの境域のなかばを西へ流れる。[桑山 1987：9-10]

ここに記された四至は先に挙げた『魏書』の記述とおおむね一致し，アム・ダリア以北の地を含める点も同じである。ただし，四至のうちの西側については，「波斯/波剌斯」とあるのみで，曖昧な情報しか得ることができない。玄奘はトハーリスターンの西部にある国として「鋭秣陀国」「胡寔健国」「呾剌健国」という3つを挙げているが，バルフ（縛喝国）の西南にあると記される最初の国（鋭秣陀国）は未比定である。一方，胡寔健国は，バルフ西方のグーズガーン（Gūzgān），すなわちイスラーム時代の資料に見えるジューズジャーン（Jūzjān）に比定されており，現在のサレ・プル（Sar-i Pul）を中心とする広い地域と考えられている［水谷 1971：42；桑山 1987：127；Minorsky 1970：328-330］。また，呾剌健国は，イスラーム時代のターラカーン（Ṭālaqān），あるいはターイカーン（Ṭāyqān）に比定されており，これはバンデ・トルキスターン山脈の北麓，現在のマイマナ（Maimana）とダウラターバード（Dawlatābād）の間，あるいはそれよりも東側にあったまちで，グーズガーンに属していたと考えられている［水谷 1971：42；桑山 1987：127; EI^2: ṬĀLAḲĀN］。しかし桑山は，その記述の簡素さなどから，玄奘は実際にこれらの国を訪れていないと考え，10世紀のペルシア語地理書『世界の諸境域（*Ḥudūd al-ʻĀlam*）』の記述を頼りに，トハーリスターンの西限を推測した［桑山 1987：128］。すなわち，『世界の諸境域』に「グーズガーナーン（…中略…）その東はバルフとトハーリスターンの諸境域，バーミヤーンの諸境域までである」とあることから，トハーリスターンの西限をバルフ辺りと考えたのである[9)]。

↘ 数の用例を確認することができるが，筆者はこれを「連山」とする記述を他に見出すことができなかった。よって，筆者はこの説を採用しない。

9）ḤʻĀ : 95 ; Minorsky 1970 : xxi ; 桑山 1987：127-129。桑山も述べる通り，この記述には「バルフとトハーリスターン」とあることから，『世界の諸境域』の著者はバルフをトハーリスターンに含めないと考えていた可能性もある。『世界の諸境域』には他にも，「フルムはバルフとトハーリスターンの間にある」という記述もある［ḤʻĀ : 99 ; Minorsky 1970 : 108］。↗

桑山が述べる通り，漢文資料の記述は不明瞭であり，トハーリスターンの西側に関しては，後代の資料から推測せざるを得ない。しかし，玄奘が上に挙げた3つの国を実際に訪れていないとしても，玄奘が『大唐西域記』においてこれらの国をトハーリスターンに含めたのには，何らかの理由があったと考えるべきであろう。筆者は，玄奘がバクトリア語の使用されていた地域をトハーリスターンとみなしたのではないかと推測している。玄奘は言語への強い関心があり，訪問した各地域の言語の概要を記録している。トハーリスターンの言語については，「文字は二十五言で，組み合わさって文ができ，これで必要にそなえている。書は横に読み，左から右へ向かう。」とあり，これがバクトリア語について記したものであることは明らかである［桑山 1987：10；吉田 1992：113a］。そして，バクトリア語文書が発見されたことにより，グーズガーン，すなわち玄奘の言う胡寔健国でバクトリア語が使用されていたことが明らかになったのである［Sims-Williams 2004a；idem 2005］。この推測が成り立つとすれば，バルフ以西，グーズガーン辺りまでの地域をトハーリスターンに含めて考えることが可能となる。

さてその後，イスラーム時代の文献にもトハーリスターンという地域名が現われる。しかし，その指示範囲は，『魏書』の吐呼羅や『大唐西域記』の覩貨邏と異なり，アム・ダリア以北の地を含まない[10]。このような変化が生じた理由を文献から知ることはできないが，考古学的手法でこの問題を考察した岩井俊平の一連の研究が参考になる［岩井 2003；岩井 2004］。すなわち，土器組成の比較に基づいた岩井の研究によれば，3世紀後半から8世紀前半頃まで，アム・ダリアの南北で共通の土器が出土し，その形状の変遷も南北でおおむね一致するという。これは，この間，アム・ダリア南北の関係が一体であったことを意味し，漢文資料に見える吐呼羅や覩貨邏がアム・ダリアの北側をもその範囲内に含んでいる状況と一致する。一方で，アム・ダリアの北側では，7世紀以降，コップ型土器，注口付壺，オッスアリなど，ソグドに由来する器物が出土し始め，これらはアム・ダリア以南では出土しない。つまり，アム・ダリアの南北で生活文化の違いが現れることになる。岩井はイスラーム資料に現れるトハーリスターンがアム・ダリア

↘ これらの記述には，著者の時代の実情が反映されているのか，それとも著者が参照した別の資料の内容が反映されているのか，判断することは難しい。『世界の諸境域』をはじめ，初期イスラーム時代に書かれた地理書の多くは，サーマーン朝時代のJayhānīが記した地理書を参照していたと考えられているが，この著作は散逸してしまい，部分的な引用しか残されていない。Jayhānīについては Gökenjan & Zimonyi 2001 を参照。

10）トハーリスターンは，上トハーリスターン（Ṭukhāristān al-ʻulyā）と下トハーリスターン（Ṭukhāristān al-suflā）とに区別されることもある。イスラーム時代の資料に見えるトハーリスターンについて，詳細は Minorsky 1970 : 337 ; EI^2 : ṬUKHĀRISTĀN を参照。

以北の地を含まないことは，7 世紀後半以降に始めてこの地に到来したムスリムが上記のような状況を認識し，河の南北を異なる生活文化を持つ地域として理解したことに起因するとしたのである[11)]。

以上，文献資料に見えるバクトリア/トハーリスターンという地域名の指示範囲を簡単に確認した。本稿でこの地名を用いる場合，基本的に『魏書』，および『大唐西域記』の記述に依拠し，その東限はバダフシャーン，パミール高原辺り，南限はヒンドゥー・クシュ山脈，北限は鉄門（デルベント），そして，問題のある西限については，実際にバクトリア語がグーズガーンで使用されていたことを重視し，バルフ以西のグーズガーン辺りまでをも含む地域と大まかに定義しておきたい[12)]。

2　トハーリスターン南部の地勢とその中心地について

本稿では，バクトリア語文書を用い，トハーリスターンの行政区画構造について考察する。しかし，そのバクトリア語文書は，トハーリスターン全域ではなく，アム・ダリア以南の限られた地域にのみ由来するものである。そこで，本節では以後の議論を円滑に進めるため，バクトリア語文書が書かれた各地域の地勢を簡単に確認すると共に，トハーリスターンの中心地について言及しておきたい[13)]。

桑山正進によると，そもそもトハーリスターンは，その自然地理的状況によって，東西に分けられ，その境界となるのは，スルハーブとフルム川流域の間に横たわる南高北低の山岳地帯である。そして，この山岳地帯の北側には，フルムとクンドゥズ（Qunduz）を結ぶ交通路が，南側にはサマンガーン（Samangān）とバグラーン・ゴーリー平原を結ぶ交通路が通っており，トハーリスターンの東西を直接つなぐ道はこの 2 つだけであるという［桑山 1990：399］。

さて，本稿で利用するバクトリア語文書の大部分は，文書中で Rob（*ρωβο*）と呼ばれる地域に由来し，Rob は現在のルーイ（Rūi）に比定されている［Sims-Williams 1997 : 14］。詳しくは次章以降で述べるが，バクトリア語文書が書かれた時代，Rob には khār（*χαρο*）

11）岩井は，ヒンドゥー・クシュ山脈南北における土器組成の比較研究も行っている。それによれば，山脈南北の土器組成は，幾つかの共通点は見られるものの，土器は基本的に異なり，両地域が異なる生活文化圏であったことが分かるという［岩井 2005］。

12）バクトリア語文書には，トハーリスターン（*τοχοαραστανο*）という地名が登場する手紙が 2 点存在する。文書 eh と jb がそれであるが，その内容からは地域名の指示範囲を知ることはできない［BD2 : 122–123, 126–127］。

13）地勢を確認するため，Google 社が提供する Google Earth Pro を利用した。地図 1，および地図 2 を参照。

と呼ばれる在地の支配者がおり，その統治権がおよんだ範囲は，北はサマンガーン，南はマドル（Madr），カフマルド（Kahmard）を覆っていた。ルーイは，フルム川の上流域，標高2000m弱の東西に1kmほどひらけた場所に位置し，ルーイからフルム川に沿って細い渓谷地帯を北上すると川が大きくひらける土地に出る。そこがサマンガーンであり，標高は1000m弱にまで下がる。一方，ルーイから，フルム川の流域を抜けて南に向うとマドルに，そこからさらに南西に向かえばカフマルドへと達する。

また，前節で述べた通り，バクトリア語文書には，トハーリスターンの西部に位置するグーズガーン（*γωζογανο*）で書かれたものが存在する。バクトリア語資料に見えるグーズガーンという地域名の明確な範囲を定めることはできないが，現在のアフガニスタンの一州にその名を留めていることからも分かる通り，広い範囲を指す地名であった。イスラーム時代の資料にもグーズガーン/ジューズジャーンという地域名で見られる歴史的なグーズガーンとは，現在のサレ・プル州，ジューズジャーン州，そしてファールヤーブ州の東部にあたる地域である[14]。

3000m級の峰を有するバンデ・トルキスターン山脈一帯からその北部に広がるこの地域の中心地は，山脈東部に発するサフィード川が標高600mほどまで下り，東側から流れてくる支流と合流する地点に位置する現在のサレ・プル，すなわちイスラーム時代の資料に見えるAnbīrで，この地名はバクトリア語文書にも見える。サフィード川は北上して平野部のシェバルガーン（Shebarghān）に達し，カラクム砂漠へと消える。グーズガーンで書かれたバクトリア語文書には，シェバルガーンからさらに北東に進んだ，アム・ダリア河岸のキリフ（Kilif）に言及するものがあり，南北に長い地域であったことがわかる。また，グーズガーンの西側は，ファールヤーブ州東部のマイマナ（Maimana），および北部のアンドホイ（Andkhui）を含むと考えられている［Cf. EI^2: D̲J̲ŪZD̲J̲ĀN］。さらに，イスラーム時代の資料や漢文資料からは，その南部にマーンシャーン（Mānshān）と呼ばれる地域があったことが知られており，正確な位置は不明であるが，サフィード川の上流域辺りであったと考えられている［Minorsky 1970: xxix, xxxvi-xxxvii］。

さらに，バクトリア語文書には，Robやグーズガーン以外に，カダグスタン（*καδαγοστανο*）という地域で書かれたものが存在する[15]。カダグスタンはバクトリア語文

14) 現在のサレ・プル州とジューズジャーン州は，かつてジューズジャーン州という1つの州であり，歴史的なグーズガーンにより近い行政区であった。Adamec 1979: 277に掲載された地図を参照。

15) 以下に述べるカダグスタンの概要を含め，詳細はSims-Williams 2008: 98-99; EIr: KADAGISTĀN; 宮本2012を参照。

書が発見されたことにより初めて知られるようになった地域名で，アフガニスタン東部を流れるスルハーブ川中流域のバグラーン・ゴーリー平原に位置していた。バーミヤーン方面から流れてくるスルハーブが，東方から流れてきたアンダラーブとドーシー（Dōshī）で合流し，さらに北流し，プリ・フムリ（Pul-i Khumri）を通過すると，広大なバグラーン・ゴーリー平原に達する。スルハーブは，さらに北流しクンドゥズ平原を通過すると，その北西で西方から流れてきたハーナーバード川と合流してクンドゥズ川となり，カラ=イェ・ザール（Qalʿa-yi Zāl）でアム・ダリアに注ぐ。

先に述べたRobを中心とする南北に長い地域と，カダグスタンのあったバグラーン・ゴーリー平原との間には，桑山が言うところのトハーリスターンを東西に分ける山岳地帯が南北に伸びている。両地域をつなぐ主な道は，南側ではドーシー経由でスルハーブを南西に遡上し，ヒラル（Khilar）で北西に転じルーイ方面へ向かうもの，あるいはヒラルからさらに南下し，ドアーベ・メフザリーン（Doāb-i Mekhzarīn）経由でマドル，およびカフマルド方面へと向かうものが考えられる。また北側では，バグラーン・ゴーリー平原からラバータク峠を経由してサマンガーンへと達する道がある[16)]。

この地域がカダグスタンと呼ばれていたことが明らかになったきっかけは，R. Gyselenがサーサーン朝の印章に見えるktkstn（kadagistān）という地名を，バクトリア語文書中にみえる*καδαγοστανο*という語と同一視したことにより，この*καδαγοστανο*が地名であると判明したことである［Gyselen 2002 : 152］。さらに，そのカダグスタンに言及するバクトリア語文書中に見えるWarlu（**οαρλο*）という地名が，吉田豊によって，従来バグラーン・ゴーリー平原に当たると考えられていた漢文資料に見える「活路」に比定されたことにより，F. Grenetがこれらの説を統合し，カダグスタンの所在地をバグラーン・ゴーリー平原に求めた［Yoshida 2003 : 158 ; Grenet 2006b : 147-148］。また，カダグスタンの出現は，4世紀後半にサーサーン朝がトハーリスターンを支配したことに起因し，その後100年余りこの地がサーサーン朝の強い影響下に置かれたと考えられている。そして，カダグスタンという地域名は8世紀後半まで存続し，カダグスタンの支配者が帯びていたkadag-bid（*καδαγοβιδο*）という称号もまた，サーサーン朝滅亡後も当地の支配者によって用いられた。

そもそもバグラーン・ゴーリー平原は，クシャーンやエフタルがその拠点を置いたことから，政治的に非常に重要な土地であったことが知られていた。そして，バクトリア語文

16） この峠にある遺跡で，クシャーン朝の王統を決定付けたラバータク碑文が発見されたことは，この交通路の重要性を示している。ラバータク碑文の最新の翻訳は，Sims-Williams 2012d : 77-78を参照。

書が発見され，カダグスタンの存在が明らかになったことにより，サーサーン朝までもがこの地を重視していたことが判明したのである。つまり，この地は長期にわたってトハーリスターンの政治的中心地であったのであり，吉田豊はカダグスタンをトハーリスターンにおける「中原」のようなものであったと述べている［吉田 2013：46-47］。また，カダグスタンからローブ地域に送られた手紙を分析した吉田の研究により，カダグスタンがトハーリスターンに出現して以降，ローブを中心とする地域は，カダグスタンの支配者である kadag-bid の強い影響下にあったことが明らかになった。つまり，両地域はバクトリア語文書が書かれたほぼ全期間にわたって政治的に一体であったのである[17)]。

ところで，トハーリスターンにおける中心地がどこであったかと考えた場合，誰もがまず想起するのはバルフであろう。しかし，バクトリア語文書群が書かれた 4-8 世紀のトハーリスターンにおいて，バルフがどれほど重要な都市であったのかは，余り明らかではない[18)]。ここでその状況を簡単に確認しておくと，まずクシャーン朝滅亡後にこの地を支配したと考えられているクシャノ・サーサーン朝，およびそれに続くキダーラが発行した杯状金貨（scyphate dinar）は，バルフで製造されたと考えられている［Göbl 1984; Cribb 2010: 99; Vondrovec 2014: 26］。さらに，貨幣学者が真エフタル（Genuine Hephthalite）と呼ぶ集団が発行した貨幣の裏面には，バクトリア語で *βαχλο*「バルフ」という銘文がある[19)]。しかし，これらの勢力がバルフをどのように管轄したのかなど，具体的な状況は分からない。

一方，サーサーン朝とバルフとの関係はといえば，4 世紀後半にカダグスタンが出現し，以後 100 年ほどにわたってトハーリスターンに強い影響力を行使したことを考えると，当然バルフもその統治下に入っていたと推測される。しかし，この間のサーサーン朝とバルフとの関係を示す資料は少なく，先に述べたクシャノ・サーサーンやキダーラと同型のペーローズの杯状金貨が 1 点知られており，これがバルフで製造されたと考えられている［Vondrovec 2014: 141-142］。5 世紀後半以降に関しては，Gyselen が研

17）　吉田 2013：58-59。kadag-bid の支配権は，Rob を中心とした地域にとどまらず，クンドゥズの東に位置するターラカーン（Ṭālaqān）にまで及んでいたと考えられている。これは，バクトリア語文書中に kadag-bid として登場する Meyam を，ターラカーンの在地の支配者が寄進した銅版銘文中に見える王 Mehama と同一視する考えに基づいている。Schøyen コレクションに所属するこの銅版銘文の内容，および kadag-bid との関係については Melzer 2006; 吉田 2013：59-60 を参照。

18）　バルフにおける考古学調査の概要については，桑山 1987：146-147 を参照。

19）　近年，貨幣学の分野からは，従来「エフタル」という語でくくられていた集団を，その貨幣に基づき，真エフタルとアルハンという 2 つの集団に分けて考える説が提示されている。これらの集団が発行した貨幣の詳細は，Alram & Pfisterer 2010; Vondrovec 2014 を参照。

究を行っているカワード1世以降のサーサーン朝期の印章の中に，bhl「バルフ」の銘を持つものが知られており，これは州単位の財務機関を管轄する役人であったと考えられている āmārgar の印章である［Gyselen 2002 : 137-138 ; cf. idem 1989 : 35b-37a］。また，同じ銘文を持つオフルマズド4世，およびバフラーム6世の貨幣も知られている［Gyselen 2003 : 164-165］。しかし，概してサーサーン朝とバルフとの関係を示す資料は多くない。

以上，本章では種々の資料に見えるバクトリア/トハーリスターンという地域名の変遷を見た上で，本稿で用いるトハーリスターンという語の指示範囲を大まかに定めた。また，バクトリア語文書が書かれた Rob を中心とする地域，グーズガーン，そしてカダグスタンの地勢を確認すると共に，カダグスタンがトハーリスターンの中心地であったこと，およびバルフの状況についても少しく言及した[20)]。これらの状況を踏まえて，次章以降，バクトリア語文書に見られるトハーリスターンの行政区画構造について見てゆきたい。

Ⅱ　トハーリスターンの行政区画構造

1　漢文資料に見られるトハーリスターンの行政区画に関わる情報

バクトリア語資料の考察に入る前に，わずかではあるが，トハーリスターンの行政区画構造に関わる漢文資料の情報を確認しておきたい。前節でも言及した張騫の報告に基づく『史記』大宛伝には，トハーリスターンの様子が次のように記されている。

大夏は大宛の西南約二千里，嬀水の南にある。その習俗は定住生活で，城や家屋が有り，大宛と同じ習俗である。（全域を統治するような）大首長はおらず，そこここの城壁のあるまちに小長を置いていた。その兵は弱く，戦闘を恐れていたが，商売を得意としていた。大月氏が西方に移動してきた時，攻撃して征服し，大夏を全て服従させた。大夏は人民が多く，百万余りいた。その都は藍市城と言い，市場があり，

20)　バルフに関しては，慧超の報告に見える吐呼羅国都城「縛底耶」をめぐる議論がある。従来バルフを指すと考えられていたこの地名をカラ=イェ・ザールとみなした桑山正進の説に対して，É. de la Vaissière は桑山説を否定し，改めてこれをバルフとみなした［桑山 1985 ; de la Vaissière 2010］。トハーリスターンの主邑の所在地に関わるこの重要な問題については，稿を改めて考えたい［Cf. 宮本・岩井 2013 : 114-115］。

様々な品物を販売している。その東南には身毒國がある。[21]

ここからは，トハーリスターンには城壁のあるまちがあり，まちごとに首長がいたが，それらを統括するような大首長は存在しなかったこと，そして藍市城という中心的なまちが存在したことが分かる[22]。また，前章で引用した『大唐西域記』の記述は以下のように続く。

（前略）数百年よりこのかた，王族は嗣をたち，土地の豪族が力を競いあい，各々君長をかってに立て，平原や険阻なところに依拠して分かれて二十七国をつくっている。原野をしきり，区分けしているけれども，みな突厥（テュルク）に配下として仕えている。［桑山 1987：10］

ここには，土地の豪族が各々で首長を頂き，様々な場所で国をつくっていたと記されており，『史記』が記すまちごとに首長がいたという状況と同じである。『大唐西域記』にはさらに，そのような首長を頂く国が27あったこと，原野を仕切り土地の区分けを行っていたことも伝えている。

これらの漢文資料からは，トハーリスターンには複数のまち，あるいは国があり，それぞれに在地の支配者がいた，という非常に漠然とした行政区画構造しか見えてこない。そこで次に，バクトリア語文書の記述を頼りに，より具体的な構造を探ってゆきたい。

2　バクトリア語文書に見られるトハーリスターンの行政区画構造

(1)　まち（*þαρο/þαυρο*）

バクトリア語の契約文書は，冒頭にその文書が書かれた年月日，場所，保証人の名前などが記されている。そして，文書が書かれた場所を網羅的に調査してゆくと，トハーリスターンには「まち」「地区」「城砦」「街区」といった行政区画が存在したことが分かる（表1）。

ここではまず，「まち（þαρο/þαυρο）」という行政区画が現われるバクトリア語文書を挙

21）　大夏在大宛西南二千餘里嬀水南。其俗土著，有城屋，與大宛同俗。無大（王）〔君〕長，往往城邑置小長。其兵弱，畏戰，善賈市。及大月氏西徙，攻敗之，皆臣畜大夏。大夏民多，可百餘萬。其都曰藍市城，有市販賈諸物。其東南有身毒國。［『史記』: 3418］

22）　藍市城がどこに当たるのかという問題は古くから多くの議論があり，ここでその全てに言及することはできない。最近では，これをフルムとする説が発表されている［Grenet 2006 : 328-329］。

表１　本稿で引用するバクトリア語文書の一覧

文書	紀年（ユリウス暦）			まち／地区	城砦	街区	その他	地域
aa	100＋?年（323＋?年）			Kandban（まち）		Frumud-marg		Rob
A	110年Ahrezhn月Abamukhwin日（332年10月13日）			Rob（まち）		Steb		Rob
C	157年Drematigan月（380年6/7月）			Rob（まち）		Regan		Rob
C'	157年Drematigan月（380年6/7月）			Kandban（まち）		Regan		Rob
F	247年Spandarmid月Ormuzd日（470年6月27日）			Lan（まち）	Burzawid		kadag-bidの法廷	Kadagstan
Ii	260年2番目のAban月（483年3月21-25日）					Yamarg		*Rob
J	295年Siwan月（517年11/12月）			Malr（まち）			khārたちの法廷	Rob
L	379年Ab月（602年1/2月）			Warnu（まち）				*Kadagstan
N	407年Khandig月Ashtad日（629年11月9日）			Samingan（地区）			Sandaran Robのkhārの法廷	Rob
Nn	436年Ab月Wad日（659年1月27日）			Lizg（まち）				Gūzgān
O	440年Sabul月（662年8/9月）	Sozargan	Kalf	Stof（まち）				Gūzgān
P	446年Ab月Wahman日（669年1月4日）			Samingan（地区）			Marogan Robのkhārの市場	Rob
Q	449年二番目の新年の月Din日（671年7月30日）			Samingan（地区）			Marogan Robのkhārの市場	Rob
R	452年Ab月20過ぎた日（675年1月21日）		Gaz	Andar（地区）				Gūzgān
S	470年Bukhsig月Risht日（693年2月26日）		Gaz	*Wanindan（地区）			城砦の法廷	Gūzgān
Ss	476年新年の月の初め（698年5月31日）			*Amber（地区）				Gūzgān
Tt	483年Hurezhn月Risht日（705年7月23日）			Lizg（地区）			城砦の法廷	Gūzgān
U	490年（712/713年）			Madr（地区）			Robのkhārたちの法廷	Rob
V	507年新年の月（729年5/6月）			Rizm（地区）	Kah			Rob
W	525年Pusig月（747年8/9月）				*Gandar			Rob
X	527年Dremitagan月（750年3/4月）				Zuwer		Wargunの（人々の）法廷	Kadagstan

※アスタリスク（*）はそのカテゴリーに属することが明確でないことを示す

げることから始めよう[23]。

文書 aa

100［＋？］年［？］月，［？］契約書は書かれた。ここ Kandban のまちの，Frumud-marg と呼ばれる街区で（下略）[24]

文書 A

110 年，Ahrezhn 月，Abamukhwin 日が過ぎた時《332 年 10 月 13 日》[25]，この婚姻契約書は書かれた。ここ Rob のまちの，Steb と呼ばれる街区で（下略）[26]

文書 C

157 年，Drematigan 月《380 年 6/7 月》，この譲渡証書は書かれた。ここ Rob のまちの，彼らが Regan と呼ぶこの街区で（下略）[27]

文書 C'[28]

157 年，Drematigan 月《380 年 6/7 月》，この譲渡証書は書かれた。ここ Kandban のまちの，Regan と呼ばれるこの街区で（下略）[29]

23）以下に引用するバクトリア語文書のテクストでは，●は判読できない文字を，［　］はテクストが欠落していること，あるいは復元されていることを，〈　〉は二次的に付加された文字を，（　）は書き落としを，｛　｝は書き誤りを示す［BD1²: 22］。また，訳文中の［　］は原文が欠落している，あるいは他の文書の記述などに基づき復元されていること，（　）は説明補筆を，…は原語の意味が判明していないことを示す。

24）*χϸον[ο]ρ ʹ [　　　　　]μαο* ●[　　　　　]*πωστογομαλο νιβοχτι αβ[ο μο κανδ]οβανα[γγο ϸαρο] αβιιο ανδαγο σιδ[ο] φρομουδ[ομαργο]ριζ[δ]ο*［BD1²: 146–147 ; BD3 : pl. 104］

25）バクトリア語文書で用いられている紀年は，「バクトリア紀元」と呼ばれ，223 年に開始されたと考えられている［de Blois 2008］。本稿では，必要に応じてバクトリア紀元に対応するユリウス暦の日付を《　》で示すこととする。ユリウス暦に換算された日付は，BD3 : 12–31 の該当箇所で確認することができる。

26）*χϸονο ρ ʹ ι ʹ Αυρηζνο μαο σαχτο Αβαμοχοινο ρωσο καλδο νοβιχτο μο ολοβωστογο μαλο αβο μο ρωβαγγο ϸαρο αβιιο ανδαγο σιδο στηβο ριζδο*［BD1²: 26–27 ; BD3 : pl. 2］

27）*χϸονο ρ ʹ ν ʹ ζ ʹ δρηματιγανο μαο εδο μο λαϸνοβωστογο μαλο νιβιχτο αβο μο ρωβαγγο ϸαρο αβιιο ανδαγο σιδο ρηγανο ραζινδο*［BD1²: 32–33 ; BD3 : 7］

28）バクトリア語の契約文書は，通常 1 枚の文書の上下にほぼ同じ内容の 2 つの文章を記し，2 つの文章の間に幾つか穴を開け，そこに紐を通して上側の文章に封をする形式を採っている。文書の記号の右上に付したプライム記号（'）は，引用する文書の内容が下側の文章であることを示す［BD1²: 23］。バクトリア語文書の形式全般については，BD1²: 9–10 ; BD2 : 15–17 を参照。

29）*χϸονο ρ ʹ ν ʹ ζ ʹ δρηματιγανο μαο ειδο μο λαϸνοβω[στ]ογο μαλο ναβιχτι αβο μο κανδοβαναγγο*↗

文書 F（カダグスタン）

247 年，Spandarmid 月，Ormuzd 日《470 年 6 月 27 日》，（この）権利放棄についての封印文書は書かれた。Lan のまちの，Burzawid の城砦の，kadag-bid の法廷で（下略）[30)]

文書 J

295 年，Siwan 月《517 年 11/12 月》，（この）封印文書，（すなわち）この購入契約書は書かれた。ここ Malr のまちの，khār たちの法廷で（下略）[31)]

文書 L（カダグスタン？）

379 年，Ab 月《602 年 1/2 月》，（この）封印文書，（すなわち）この購入契約書は書かれた。ここ Warnu のまちで（下略）[32)]

文書 Nn（グーズガーン）

436 年，Ab 月，Wad 日《659 年 1 月 27 日》，（この）購入契約書は書かれた。ここ Lizg と呼ばれるこのまちで（下略）[33)]

文書 O（グーズガーン）

440 年，Sabul 月《662 年 8/9 月》，私は（この）誓約書を書いた。ここ Sozargan の，Kalf の，Stof と呼ばれるこのまちで（下略）[34)]

すでに前章で述べたように，文書 A，および C に見える Rob は現在のルーイにあたる[35)]。そして，文書 J の Malr はマドルに比定されている［Sims-Williams 1997 : 14］。ま

↘ *þαρο αβιιο ανδαγο σιδο ρηογανο ριζδο*［BD1²: 32–33 ; BD3 : pl. 9］

30） *χþονο σ΄ μ΄ ζ΄ μαυο σπανδαρομιδο ρωσο ωρομοζδο καλδο ναβιχτο μαλρογο αβησαχοανιγο αβο μολαναγγο þαρο αβο βορζαοιδο αβο λιζο αβο καδαγοβιδο αλβαρο*［BD1²: 38–39 ; BD3 : pl. 14］

31） *αχþονο σ΄ ϙ΄ ε΄ μαυο σιοανο καλδο ναβιχτο μολραγο μαχιρσοβωστι μαλο αβο μ[α]λραγγο þαυρο αβο χαρανο αλβαρο*［BD1²: 48–49 ; BD3 : pl. 24］

32） *αχþονο τ΄ ο΄ θ΄ μαυο αββο καλδο ναβιχτο μολρογο μαχιρσοβωστιγο μαλαβο οοαρνοοαγγο þαρο*［BD1²: 58–59 ; BD3 : pl. 30］

33） *αχþονο υ΄ λ΄ ς΄ μαυο αββο ρωσο οαδο καλδο ναβιχτο χιρσοβωστιγο μαλο αβιιο þαυρο ασιδο λιζγο ραζινδο*［BD1²: 74–75 ; BD3 : pl. 41］

34） *αχþονο υ΄ οδο μ΄ μαυο σαβολο καλδομο ναβιχτο χοησαοοβωστιγο μαλαβο σωζαργανο αβο καλφ αβιιο þαρο ασιδο στωφ ραζινδο*［BD1²: 80–81 ; BD3 : pl. 46］

35） 文書 C に見える Rob という「まち」の名前は，その下側に書かれた文書 C΄では Kandban↗

た，文書 L の Warnu はクンドゥズあたりであったと考えられている[36]。その他の「まち」は未比定である。

ここに挙げた文書に見られる行政区画の構造を見ると，「○○まち，△△街区（文書 aa, A，C)」,「○○まち，△△城砦，□□法廷（文書 F)」となっており，「まち」という行政区画が，その中に「街区」や「城砦」を含むものであったことが分かる。

ただし，文書 J の状況は少し異なり，「まち」の名前のみが記され，その中に「khār たちの法廷」があったと記されている[37]。さらに，グーズガーンで書かれた文書に見える構造も少し異なる。まず，文書 Nn では Lizg という「まち」の名前のみが記されている。また文書 O は，「ここ Sozargan の，Kalf の，Stof と呼ばれるこのまちで」書かれたと記されており，この構造は，Kalf が「まち」を内包するような広い地域を指し，Sozargan はそれよりもさらに広い地域名であったことを推察させる。しかし，Kalf はイスラーム時代の資料に見られる Kālif（現キリフ）に比定されているものの，Stof という「まち」の名前も，Sozargan という地域名もこの文書にしか登場せず，いずれも地名が比定されていないため，詳細は分からない[38]。

(2)　地区（*ωδαγο*）

次に，その指示範囲が「まち」と同じであったと思われる「地区（*ωδαγο*)」という行政区画について見てみよう。

↘ となっており，1 つの「まち」が異なる 2 つの名前（Rob/Kandban）を持っていたことが分かる。この事実が意味するところを直ちに判断することはできないが，バクトリア語文書中でこのような事例は Rob だけのことである。X. Tremblay によれば，Kandban とは「輝かしいまち」という意味であるという［Tremblay 2003 : 123］。

36)　Warnu という地名は，アッリアノスの *'Άορνος*，紀元前 4 世紀のアラム語文書に見える Warnu と同じ地名と考えられている［BD2 : 242a ; Naveh & Shaked 2012 : 19］。Sims-Williams は，これをイスラーム時代の資料に現われるワルワーリズ（Warwāliz <*War(a)wā(ng)-liz「Warnu の城砦」）のもとになった地名と考えており，ワルワーリズは今のクンドゥズに当たるとされている［Sims-Williams 1997 : 16 n. 28 ; idem 2008 : 101 n. 39］。註 17）で述べたように，カダグスタンの支配者である kadag-bid の統治権はクンドゥズの東方のターラカーンにまで及んでいたので，この文書が書かれたクンドゥズはその支配下にあったことになる。

37)　これがどのような状況を表している可能性があるかについては，「城砦」の項で述べる。

38)　Kalf の比定については，Sims-Williams 2004a : 1050-1052 を，イスラーム時代の地理書に見えるケリフ/カーリフについては，le Strange 1905 : 442 を参照。またこの地名については，Sims-Williams 2004b : 543-544 も参照。なお，バクトリア語文書には「まちの支配者（*þαροληρο/þαροληργο*)」という称号を持つ人物が存在したことが知られているが，文書中に 2 度しか言及されず，その詳細は不明である［BD2 : 284a］。

文書 N

407 年，Khandig 月，Ashtad 日《629 年 11 月 9 日》，（この）封印文書，（すなわちこの）保証契約書は書かれた。ここ Samingan 地区の，Sandaran の，Rob の khār の法廷で（下略）[39)]

文書 P'

446 年，Ab 月，Wahman 日《669 年 1 月 4 日》，［この封印文書，すなわちこの購入］契約書は［書かれた］。ここ Samingan 地区の，Marogan の，［Rob の khār の市場で］（下略）[40)]

文書 Q

449 年，二番目の新年の月，Din 日《671 年 7 月 30 日》，（この）負債契約書は書かれた。ここ Samingan 地区の，Marogan の，Rob の khār の市場で（下略）[41)]

文書 R（グーズガーン）

452 年，Ab 月，20 が過ぎた（日）《675 年 1 月 21 日》，（この）封印文書，（すなわちこの）誓約書は書かれた。Gaz の，Andar 地区で（下略）[42)]

文書 U

490 年《712/713 年》，この封印文書，（すなわちこの）耕作契約書と借地（契約書）は書かれた。ここ Madr 地区の，Rob の khār たちの法廷で（下略）[43)]

これらの「地区」のうち，Samingan（文書 N, P, Q）はサマンガーンに比定されている［BD2 : 262a］。また，文書 U に現れる Madr は，先に「まち」の項で挙げた文書 J の

39） *χφονο υ ' ζ ' μαυο χανδιγο ρωσο αρταδο καλδο ναβιχτο μολρογο πιτανοβωστιγο μαλαβο σαμιγγανο ωδαγο αβο σανδαρανο αβο ρωβοχαραγγο αλβαρο* ［BD1^{2} : 68–69 ; BD3 : pl. 37］

40） *αχφονο υ ' μ ' ς ' μαυο αββο ρωσο οαυμανο*［*καλδο ναβιχτο μολραγο μαχιρσοβωστι*］*γο μαλαβο σαμιγγανο ωδαγο αβο μαρωγανο αβο ρω*［*βοχαραγγο οασαρο*］［BD1^{2} : 84–85 ; BD3 : pl. pl. 52］

41） *αχφονο υ ' μ ' θ ' μαυο βιδδινωσαρλο ρωσο δδινο καλδο ναβιχτο παροβωστιγο μαλαβο σαμιγγανο ωδα*［*γο α*］*βο μαρωγανο αβο ρωβοχαραγγο οασαρο* ［BD1^{2} : 88–89 ; BD3 : pl. 56］

42） *αχφονο υ ' ν ' β ' μαυο αββο σαχτο κ ' καλδο ναβιχτο μολραγο χοησαοοβωστιγο αβο γαζο αβο ιανδαρο ωδαγο* ［BD1^{2} : 92–93 ; BD3 : pl. 60］

43） *αχφονο υ ' ϙ ' καλδο ναβιχτο εμοδδρογο βονοαρζοβωστιγο οδο χοζογανιγο μαλαβο μαδδρο ωδαγο ρωβοχαρανο αλοβαρο* ［BD1^{2} : 106–107 ; BD3 : pl. 78］

Malrと同じく，マドルに比定されている[44]。さらに，文書RのAndarは，これを『世界の諸境域』に見えるダレ・アンダラ（Dar-i Andara）に比定する説があり，現在のマイマナ近郊と考えられている［Sims-Williams 2004a : 1053 ; cf. Minorsky 1970 : xxi-xxii, 334-335］。

「まち」であるMalrと「地区」であるMadrとが同定されることから，この2つの行政区画は，その指示範囲が同じであったと考えられるが，ここで注目すべきは，「まち」から「地区」への変化である。これまで挙げてきた文書の年代を見れば分かる通り，「まち」という行政区画は古い時代の文書に，「地区」は新しい時代の文書に現れている。Sims-Williamsは，「まち」が最後に現れるのが文書O《662年8/9月》であり，「地区」が最初に現れるのが文書N《629年11月9日》であることから，何らかの理由でこの間に「まち」が「地区」に代わったと考えている［BD2 : 284a］。この「まち」から「地区」への変化については，再度言及する。

なお，ここでもグーズガーンで書かれた文書Rに見える状況は他と異なっている。ここには「Gazの，Andarの地区で」書かれたとある。よってこのGazは，「地区」を内包する広い地域名と推測されるが，その具体的な範囲や位置について，今のところ確定的な見解は提示されていない[45]。しかし，「まち」の場合と同様，グーズガーンに由来する文書に，Robを中心とする地域とは異なる点が見られることは興味深い。

(3) 城砦（*λιζο*）

「まち」と「地区」に続き，これらの中にあったと思われる2つの行政区画について見てゆきたい。すでに「まち」の項で挙げた文書Fでは，Lanの「まち」の中に，Burzawidという「城砦」が存在したことが記されていた。まずは，「城砦」に言及する

---

44) Malr（*μαλρ*）からMadr（*μαδδρ*）への変化，すなわちバクトリア語における*λρ*＞*δδρ*の変化については，Sims-Williams 2010b : 208 n. 8を参照。

45) 吉田豊はこのGazを，『バイハキー史（*Tārikh-i Bayhaqī*）』に見えるダッラ=イェ・ギャズ（Darra-yi Gaz）に比定する考えを提示した［Yoshida 2003 : 158 ; cf. Bosworth & Ashtiany 2011 : III 208 n. 225 ; 稲葉 1990 : 648-649, 669 n. 21］。また，Sims-Williamsは，アルメニアの地理書で，マーンシャーン（Mānshān）とサングチャラク（Sangcharak）の間に記されるGčakという地名に比定する説，および吉田と同じ説を提示した［Sims-Williams 2004a : 1053-1054 ; cf. Marquart 1901 : 85-87］。さらにこのGazは，バーミヤーンの西方にあるタンゲ・サフェーダク（Tang-i Safedak）で発見され，8世紀初頭にこの地に仏塔が建立されたことを伝えるバクトリア語碑文との関係でも注目されており，稲葉穣はこの地名をグーズガーンとバーミヤーンの西方地域との繋がりを示す重要な指標の1つと考えている。詳細はInaba forthcoming bを参照。なお，タンゲ・サフェーダク碑文についてはLee & Sims-Williams 2003を，仏塔の寄進者の名前については，吉田 2013 : 62を参照。

他の文書を挙げよう。

文書 S（グーズガーン）

470 年，Bukhsig 月，Risht 日《693 年 2 月 26 日》，（この）封印文書，（すなわちこの）誓約書は書かれた。Gaz の，Wanindan の，城砦の法廷で（下略）[46)]

文書 Tt（グーズガーン）

483 年，Hurezhn 月，Risht 日《705 年 7 月 23 日》，（この）封印文書，（すなわちこの）成された奉仕に対する…契約書は書かれた。ここ Lizg の，城砦の法廷で（下略）[47)]

文書 V

507 年，新年の月《729 年 5/6 月》，（この）購入契約書は書かれた。ここ Rizm の，Kah の城砦で（下略）[48)]

文書 X（カダグスタン）

527 年，Dremitagan 月《750 年 3/4 月》，この封印文書は書かれた。Zuwer の城砦の，Wargun[49)]（の人々）の法廷で（下略）[50)]

文書 V に見える Kah は，カフマルドに比定されている［Sims-Williams 1997 : 14］。ここで Kah は，Rizm という場所にあったと記されているが，Rizm は「まち」とも「地区」とも記されていない。しかし，別の文書（文書 U）に「Rizm の地区における習慣なので（*σογγο αβο ριζμο ωδαγο αβδδινινδο*）」という表現が見えることから，これが「地区」であったことが分かる。よって，Kah は Rizm という「地区」の中にあった「城砦」ということになり，Rizm のおおよその位置も検討がつく。また，文書 Tt に見える Lizg につい

46） *ιαχϸονο υ˙ο˙ μανο βοχσιγο ρωσο ριϕτο καλδο ναβιχτο μοδδραγο χοησιαοοβωστιγο μαλαβο γαζο αβο οανινδανο αβο λιζο αλβαρο*［BD1^2 : 94–95 ; BD3 : pl. 62］

47） *ιαχϸονο υ˙π˙γ˙ μανο υορηζνο οδο ρωσο ριϕτο καλδο ναβιχτο μοδδραγο πιδο κιρδο ασπασο βονο παλοβωστιγο μαλαβο λιζγο αβο λιζο αλβαρο*［BD1^2 : 104–105 ; BD3 : pl. 74］

48） *ιαχϸονο ϕ˙ζ˙ μανο νωγοσαρδο καλδο ναβιχτο χιρσοβωστιγο μαλαβο 〈ρι〉ζμο αβο κανο αβο λιζο*［BD1^2 : 116–117 ; BD3 : pl. 86］

49） Wargun は，吉田豊によって漢文資料に見える活路に比定され，カダグスタン発見の契機となった Warlu の変化した形である。前章 2 節を参照。

50） *ιαχϸονο ϕ˙κ˙ζ˙ μανο δδρημιταγανο καλδο ναβιχτιμοδδρογο μαλο αβο ζοοηρο λιζο οαργονανο αλβαρ*［BD1^2 : 136–137 ; BD3 : pl. 97］

ても，先に引用した文書 Nn に「Lizg と呼ばれるこのまち」とあった。よって，これら 2 点の文書，および本項の冒頭に言及した文書 F に見える行政区画の構造は「○○まち/地区，△△城砦」というものであり，「城砦」という行政区画が「まち」や「地区」の中にあったことが分かる。ただし，ここで注意すべきは，文書 Tt に記された状況である。Lizg（*λιξγο*）という「まち」の名前が *λιξο*「城砦」に由来していることから考えると，「まち」の名前と「城砦」の名前が同じであった可能性も想定しておかねばならないだろう。先に「まち」の項で見た文書 J には，「Malr のまちの，khār たちの法廷」で書かれたとあり，また「地区」の項で見た文書 U には，「Madr 地区の，Rob の khār たちの法廷」で書かれたとあった。これらの文書には，「城砦」という行政区画は見えないが，実際には Malr/Madr の中に城砦があり，異なる名前で呼ばれていなかったため，わざわざ記す必要がなかったという可能性もある。

さて，この「城砦」に言及する文書にもいくつかの特殊な状況が見てとれる。まず，グーズガーンで書かれた文書 S は，Gaz の Wanindan の中にある「城砦」で記されたものであった。先に「地区」の項で見た通り，文書 R に現れる Gaz は Andar という「地区」を内包する，広い範囲を指す地域名であったと推測される。このことから考えると，文書 S に見える Wanindan が「まち」，あるいは「地区」であった可能性はあるが，この地名はここで 1 度言及されるのみで，詳細は不明である。

もう 1 つの例外は文書 X で，ここには「城砦」の名前しか記されていない。この文書は，バクトリア語文書群の中でも最も新しい時期に属する文書であるが，この時代，トハーリスターンにはすでにアラブ=ムスリムの支配が及んでいた。「城砦」を内包する「まち」や「地区」といった行政区画が記されていないことが，政治的背景によるのかどうかは俄かに判断できないが，トハーリスターンを支配したアラブ=ムスリムの統治機構と在地の行政区画との関係については次章で扱う[51]。

(4) 街区（*ανδαγο*）

つぎに「街区」について見てみよう。この「街区」は，すでに「まち」の項で引用した文書 aa，A，C，C′に見えていたが，念のため該当文書の書かれた場所のみ列挙しておこう。

51） バクトリア語文書中には，「城砦」という行政区画と関係したと思われる「城砦長（*λιξοβιδο*）」という称号を持つ人物が登場する。これらの人物は在地の支配者 khār の近親者である場合があった［宮本 2014 : 130–134］。

文書 aa：Kandban のまちの，Frumud-marg と呼ばれる街区

文書 A： Rob のまちの，Steb と呼ばれる街区

文書 C：Rob のまちの，彼らが Regan と呼ぶこの街区

文書 C'：Kandban のまちの，Regan と呼ばれるこの街区

さらに，これ以外にも「街区」に言及する文書が 1 点存在する。

文書 Ii

260 年，2 番目の Aban 月《483 年 3 月 21～25 日》，［この封印文書，…は書かれた。…の，］Yamarg と呼ばれる街区で（下略）[52]

以上の文書には，Frumud-marg，Steb，Regan，Yamarg という 4 つの「街区」の名前が見られるが，どれも地名の比定はなされていない。それでも，これらの文書から興味深い点が判明する。それは，文書 aa，A，C/C'の 3 点が同じ Rob/Kandban という「まち」の異なる「街区」で書かれている点である。すなわち，「まち」という行政区画の中には，複数の「街区」が存在したのである。ただし，「街区」の存在を確認できる文書はここに挙げたものが全てである上に，文書 Ii は欠損箇所が多く，「街区」がどのような行政区画の中にあったのかが不明である。そのため，「街区」が Rob/Kandban の「まち」にのみ存在したのか，それとも他の「まち」，あるいは「地区」にも存在したのかは分からないが，「街区」が「まち」の中にあった行政区画であることは確実である[53]。

また，「地区」の項で見た Samingan で書かれた文書からは，この場所にも「街区」のようなものが存在していた可能性がうかがえる。改めて文書が書かれた場所のみを示しておこう。

文書 N：Samingan 地区の，Sandaran の，Rob の khār の法廷

文書 P：Samingan 地区の，Marogan の，［Rob の khār の市場］

文書 Q：Samingan 地区の，Marogan の，Rob の khār の市場

---

52) ［］*χþονο σ' ξ' μαο ανιαβανο καλδο*［ *αβιιο*］*ανδαγο ασιδο ιαμαργο ριζδο* ［BD1^2: 46–57; BD3: pl. 21］

53) 文書には「街区長（*ανδαγοβιδο*）」という称号が見られるが，文書 A で一度登場するのみで，詳細は全く分からない［BD1^2: 26–27］。

このように，Samingan という１つの「地区」の中に，Sandaran と Marogan という複数の異なる地名が見える。このことから，これらは Rob/Kandban における「街区」に相当するようなものであったと考えることもできるが，詳細は分からない。

3　在地の支配者の統治領域と行政区画構造

以上見てきたように，トハーリスターンには，「まち」，「地域」，「城砦」，「街区」という行政区画があり，「まち」と「地域」の中に「城砦」や「街区」が存在した。これらの行政区画が，実際にどの程度の広がりをもっていたのかを知ることは難しいが，Rob の khār の統治権が及んだ範囲内に限れば，おおよその見当がつきそうである。

第Ⅰ章で若干言及したが，まずはローブの khār の統治権が及んだその範囲について見てゆこう［Cf. Sims-Williams 1997 : 14］。まず，文書 N と Q が領域に北側に関する手掛かりとなる。これらの文書はそれぞれ，「Samingan の地区」の「Rob の khār の法廷」，および「Rob の khār の市場」で書かれていた。また，文書 J，U，V が南側に関する判断材料となる。まず，文書 J は「Malr のまちの，khār たちの法廷」で，そして文書 U は「Madr の地区の，Rob の khār たちの法廷」で書かれたものであった[54)]。さらに，「Rizm（地区）の，Kah の城砦」で書かれた文書 V（土地の購入契約書）では，土地を売却した人々が「Rob の khār の僕（*ρωβοχαρο μαρηγο*）」と呼ばれており，また契約対象となっている土地の四至について記した箇所には，「Rob の khār が Baradikan の主に与えた地所（*αγγαργο ασιδο χοδδηοο βαραδδικανο ρωβοχαρο λαδδιγινδο*）」という文言がある［BD1^2: 116-119］。これらのことから判明するのは，まず，Rob の khār が統治する領域は，複数の「まち」や「地域」を覆うものであったことである。そして，その具体的な範囲は，北は Samingan（サマンガーン），南は Malr/Madr（マドル），Kah（カフマルド）にまで広がっていたことが分かる。

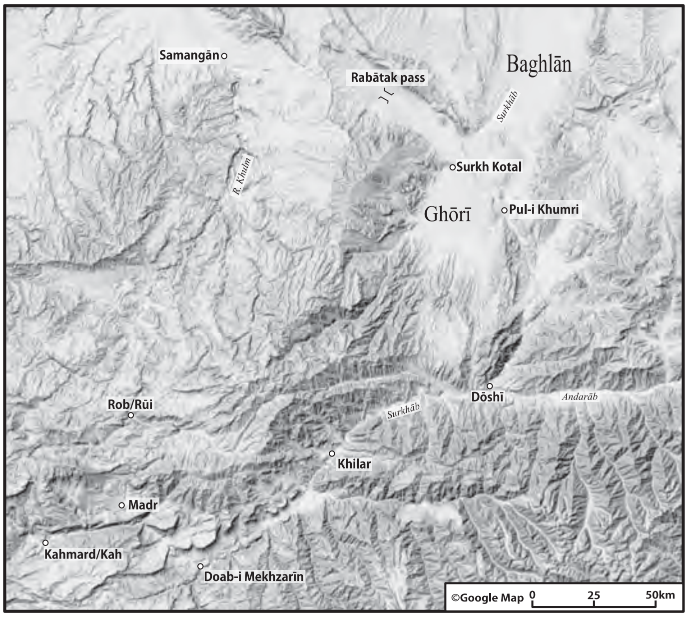
やや脇道に逸れるが，この Rob の khār の支配領域を漢文資料の中に探ると，玄奘が覩貨邏の二十七国の１つとして挙げる「紇露悉泯健」国が，それとほぼ合致しそうである。

---

54)　文書 J と U では khār が複数形になっている。両文書が同じ場所で書かれたことから考えると，文書 J の「khār たち（*χαρανο*）」と，文書 U の「Rob の khār たち（*ρωβοχαρανο*）」は同じことを言っている可能性がある。しかし，ここで複数形が使われていることが何を意味するのかは分からない。また，ここで注意しておかねばならないのは，「Burz-ohrmuzd，Malr/Madr の khār」という銘文を持つ捺印物（sealing）が知られていることである［Lerner, Saeedi & Sims-Williams 2009 : 217-218 ; Lerner & Sims-Williams 2011 : AA 4.1, 4.2 ; cf. Sims-Williams 2010a : no. 100］。あるいは一時期 Malr/Madr にも khār がおり，文書 J の「khār たち」は，Rob の khār と Malr/Madr の khār の双方を指しているのかもしれない。

この紇露悉泯健は，紇露と悉泯健という2つの地名が組合わさったものと考えられており，それぞれルーイとサマンガーンに比定されている［水谷 1971：38；桑山 1987：13, 142-144］。『大唐西域記』には，マドルやカフマルドに当たる地名は現れないが，この「紇露悉泯健」国が Rob の khār の支配領域とおおむね重なることは注目に値する。すなわちこのことから，玄奘は在地の支配者が実際に統治していた領域を「国」と呼んでいたことが分かるのである。

さて，まずこのローブの khār の支配領域における「まち」と「地区」を見ると，フルム川に沿って北から南に，Samingan（サマンガーン）と Rob（ルーイ），フルム川流域から南にスルハーブ上流域に抜け Malr/Madr（マドル）と Rizm（カフマルド辺り）がある。そして，実際の地形を確認すると，規模の差こそあれ，これらの「まち」や「地区」は，いずれも川の流域のひらけた土地に位置し，河川や交通路が合流する場所であったことが分かる[55]。つまり，「まち」や「地区」は，そのような土地を中心に形成されていたと考えることができよう。「まち」や「地区」の実際の規模は分からないが，Rob，Malr/



地図2　Rob 周辺地域拡大図

55） 4つの場所の地形は，Google Earth を用いて確認した（地図2を参照）。おおよその経緯度は次の通り：サマンガーン（北緯36度15分，東経68度01分）；ルーイ（北緯35度33分，東経67度49分）；マドル（北緯35度24分，東経67度49分）；カフマルド（北緯35度19分，東経67度38分）。

Madr，そして Rizm は，互いにそれほど離れておらず，余り大きなものではなかったと推測される[56]。

そのような「まち」，あるいは「地区」の中にあったのが「城砦」である。しかし，城砦はその名称が判明している例が少ない上に，地名が比定されているのは，文書 V の Kah，すなわちカフマルドのみである[57]。この事例だけから「まち」や「地区」と「城砦」の関係を考察することはできないが，ソグドなどのオアシス都市国家の構造との比較が有効かもしれない。ソグドなどのオアシス都市国家の構造は，基本的にクヘンディズ「城砦」とシャフリスターン「市街地」からなり，巨大なオアシスにはラバド「郊外」があった［吉田 1999：45］。バクトリア語文書の「まち」と「地区」が，オアシス都市におけるシャフリスターンに当たるとすれば，「城砦」はその中にあった，あるいは隣接していたクヘンディズに当たると考えることができる。

「城砦」の実際の規模に関しては，バクトリア語文書からそれを知ることは難しいが，クシャーン朝期のスルフ・コタル碑文からその手掛かりを得ることができる。バグラーン・ゴーリー平原の西端に建てられたクシャーン朝の神殿跡であるスルフ・コタル遺跡から発見されたこの碑文は，*ειδο μα λιζο μο κανηρκο οανινδο βαγολαγγο*「この城砦（は）勝利者たる Kanishka の神殿（である）」という一文で始まる［Gershevitch 1979 : 64 ; Sims-Williams 2012d : 78b］。ここに見える *λιζο*「城砦」が，スルフ・コタル神殿を指していることは明らかであり，バクトリア語文書の「城砦」は，この神殿と同規模と考えることができるかもしれない。高さ約 60 m の丘陵に建設されたこの階段状の神殿は，望楼と稜堡を伴う全長 1 km ほどの壁に取り囲まれており，その規模は東西約 200 m，南北約 400 m である［Schlumberger, le Berre & Fussman 1983 : 17-20, pl. III ; cf. 桑山 1987：140］。先ほど述べた通り，バクトリア語文書中で地名が比定されている「城砦」は Kah（カフマルド）だけであったが，ドアーベ・メフザリーンからカフマルドやマドルに至る渓谷沿いには，幾つかの城砦跡が点在していることが M. le Berre によって報告されている［le Berre 1987 : 63-66, pl. 76-77 ; cf. Ball 1982 : 514 carte 97 ; 岩井 2014：83 pl. 4］。le Berre の報告書は，出版にいたる経緯の中で多くの測量図が失われており，これらの城砦跡の実際の規模は分からないが，ここで報告されている城砦跡のような建造物が，バクトリ

56） Rob と Samingan との間は，直線距離で 80 km ほど離れているが，衛星画像を見るとその間には Rob（ルーイ）と同規模のひらけた土地をいくつか確認することができる。Rob と Samingan の間に他の「まち」や「地区」が存在していた可能性は十分あるだろう。

57） ただし，後述するように，文書 W に見える Gandar は，Mard や Rizm 近郊の城砦の名称であった可能性があり，おおよその位置は推測可能である。

ア語の「城砦」にあたる可能性はあろう58)。

最後に，「街区」について触れておきたい。「城砦」とは別に，「まち」の中には「街区」という区画が存在していた。その実態は全く分からないが，「街区」の名称として挙げられている Frumud-marg（*φρομουδομαργο*）は，*μαργο*「平原」という要素を持っており，Yamarg（*ιαμαργο*）は *μαργο*「平原」に定冠詞の *ια* が付いた形である。あるいはこの「街区」は，川の流域のひらけた土地を区分けした一部を指していたのかもしれない。

Ⅲ　トハーリスターンの行政区画と支配勢力との関係

最後に，トハーリスターンを支配した勢力の統治の在り方と，当地の行政区画構造との関係について，若干の考察を行いたい。3 世紀前半にクシャーン朝が滅亡して以後，トハーリスターンは，クシャノ・サーサーンやサーサーン朝，そしてキダーラ，エフタル/アルハン，突厥といった遊牧系集団の支配下に置かれたと考えられている。しかし，これらの勢力が支配していたことを示す断片的な情報がバクトリア語文書に見えるものの，その支配の実態は明らかになっておらず，支配勢力がどのような統治機構を設けたのかを資料から知ることができるのは，この地に唐の支配が及んで以降のことである59)。

1　唐のトハーリスターン支配にいたる経緯

唐がトハーリスターンを統治下に置くまでの経緯を簡単に記すと，次のようになる［Cf. 稲葉 2003 : 370-367］。6 世紀中頃，サーサーン朝と突厥との挟撃によってエフタルの勢力が瓦解する。その後，583 年に突厥は東西の勢力に分かれ，東突厥は 630 年に唐に服属することになる。西突厥は，619 年に即位した統葉護可汗のもと最盛期を迎え，トハー

---

58)　Cf. 桑山 1989。le Berre が報告する城砦跡のうち，Ruine No. 3a, 3b, 4, 5, 6 が，7～13 世紀に年代付けられている［Ball 1982 : no. 233, 682］。「城砦」に関しては，4 世紀後半頃の手紙と考えられている文書 cg の中で，バーミヤーン（Bāmiyān）が「城砦」と呼ばれていることが興味深い［BD2 : 80-81 ; cf. Sims-Williams 2008 : 90-93］。トハーリスターンとバーミヤーンとの関係については，岩井 2014 も参照。

59)　バクトリア語文書の中には，クシャノ・サーサーンの諸王の 1 人 Warahran Kushānshāh，あるいはその一族からの手紙（文書 ba）が 1 点知られている［BD2 : 52-53］。また，第 I 章で記した通り，4 世紀後半以降，トハーリスターンがサーサーン朝の強い影響下に置かれたことにより，カダグスタンと呼ばれる地域が出現した。キダーラの存在はバクトリア語文書に現れないが，エフタルに関しては，「エフタルへの税」に言及する契約文書（文書 I, Ii, J）や，支出簿（文書 al）が存在する［BD1^2 : 44-55, 164-165］。さらに，支配勢力の影響は Rob の khār が帯びる称号にも反映されている［Sims-Williams 2008 : 93-94 ; 宮本 2014 : 127-130］。

リスターンはその支配下にあった。しかし，628年，統葉護が伯父の莫賀咄に殺害されると，西突厥は内乱状態へと向かい，唐が西方へと勢力を拡大することとなる。

640年に高昌国を滅ぼし，そこに安西都護府を設置した唐は，641年，西突厥の乙毘咄陸可汗の退位を望んだ配下からの要請を受け，乙毘射匱可汗を即位させる。642年，乙毘射匱は乙毘咄陸を破り，乙毘咄陸はトハーリスターンへと逃亡する。乙毘咄陸の敗走により，彼によって葉護の称号を与えられタラスにいた阿史那賀魯は，648年に唐に降った。唐は賀魯に左驍衛将軍・瑤池都督を授け庭州（ビシュバリク）に住まわせたが，649年に太宗が死去すると，賀魯は反旗をひるがえし，乙毘射匱可汗支配下の諸部を併合した。651年には乙毘咄陸が統治していた西方の領域を支配下に入れた賀魯は，雙河と千泉（メルケ）に本営を設け，沙鉢羅可汗と号し，西突厥の十姓（咄陸五部・弩失畢五部）を束ねるにいたった。652年，唐は梁建方と契苾何力を，さらに657年には，蘇定方，任雅相，蕭嗣業，迴紇婆閏らを派遣し，賀魯を攻撃させた。蘇定方率いる軍は，イリ河の西に逃走した賀魯を追い，碎葉水（スイアーブ）でこれを大敗させた。さらに西走した賀魯は，石国（タシュケント）の蘇咄城でその城主に捕らえられ，彼を追ってきた蕭嗣業に引き渡された[60]。

阿史那賀魯の反乱を鎮圧すると，唐はその旧領域の再編を開始する。西方に関しては，658年，康国（サマルカンド）と吐火羅（トハーリスターン）に使者を派遣し，地域の風俗，物産などを調査させた。トハーリスターンに派遣された王名遠は，3年間の実地調査を行い，661年に帰国し，『西域図記』なる報告書を提出した。また，この658年の遣使と同時に，西域諸国に関する書物の編纂が命ぜられ，許敬宗の監督のもと，玄奘や王玄策の記録をはじめ，それまでに知られていた情報をもとに，同年中に『西域図志』60巻が編まれた[61]。そして，王名遠が帰朝した661年には，于闐（コータン）以西の諸国に十六都督府が設置された。

2　西域十六都督府とトハーリスターンの行政区画

『新唐書』地理志には，十六都督府の名称とそれが設置された国，および都督府が管轄した州の名称とその設置場所が列挙されている［『新唐書』：1135-1137］。ここでは参考のため都督府とそれが置かれた場所のみを挙げておきたい（地図3）。

60）反乱鎮圧の経緯は，松田 1970：341-351に詳しい。
61）『西域図志』60巻は，666年に新たに図画40巻が加えられ，計100巻となった。この書物の編纂過程については内田 1965を参照。

地図３　十六都督府の所在地

月支都督府：吐火羅葉護，阿緩城（カラ=イェ・ザール）

大汗都督府：嚈噠部落，活路城（バグラーン・ゴーリー）

條支都督府：訶達羅支國，伏寶瑟顛城（ザーブリスターン）[62]

天馬都督府：解蘇國，數瞞城（シューマーン）[63]

高附都督府：骨咄施國，沃沙城（フッタル）

脩鮮都督府：罽賓國，遏紇城（カーピシー）

寫鳳都督府：帆延國，羅爛城（バーミヤーン）

悦般州都督府：石汗那國，豔城（チャガーニヤーン）

奇沙州都督府：護時犍國，遏蜜城（グーズガーン）

姑墨州都督府：怛沒國，怛沒城（テルメズ）

旅獒州都督府：烏拉喝國，摩竭城（？）

崑墟州都督府：多勒建國，低寶那城（ターラカーン）

62）「訶達羅支」とテュルク系民族ハラジュとの関係については，稲葉 2003; Yoshida 2003: 156b-157a を参照。また，A. Palumbo は，「伏寶瑟顛」を「伏實瑟顛」と読み替え，カーブルとガズニーの西側に位置する山岳地帯の地名ウジーリスターン（Wujīristān）を写したものと考えた［Cf. 稲葉 2003: 341 n. 61］。

63）「解蘇」が，『大唐西域記』に記されるテュルク系民族の名前「奚素」，またムグ山文書に見える xysw と一致することについては，Yoshida apud Grenet & de la Vaissière2002: 190 n. 77 を参照。

至拔州都督府：倶蜜國，褚瑟城（クメーズ）

鳥飛州都督府：護蜜多國，摸逵城（ワッハーン）

王庭州都督府：久越得犍國，步師城（クバーディヤーン）

波斯都督府：波斯國，疾陵城（？）

ここに見えるように，トハーリスターンには幾つかの都督府が設置された。本節でまず扱うのは，それらのうちの１つ月支（月氏）都督府である。カラ=イェ・ザールに位置比定されている阿緩城に置かれたこの都督府は，25 の州を管轄した[64]。それらの州の名称と置かれた場所を一覧形式で示すと以下のようになる。

藍氏州：鉢勃城，大夏州：縛叱城，漢樓州：倶祿犍城，弗敵州：烏邏氈城，沙律州：咄城，媯水州：羯城，盤越州：忽婆城，忸密州：烏羅渾城，伽倍州：摩彥城，粟特州：阿捺臘城，鉢羅州：蘭城，雙泉州：悉計蜜悉帝城，祀惟州：昏磨城，遲散州：悉蜜言城，富樓州：乞施巘城，丁零州：泥射城，薄知州：析面城，桃槐州：阿臘城，大檀州：頰厥伊城具闕達官部落，伏盧州：播薩城，身毒州：乞澀職城，西戎州：突厥施怛駃城，篋頡州：騎失帝城，疊仗州：發部落城，苑湯州：拔特山城［『新唐書』：1135-1136］

これらの州のほとんどは，その位置どころか，どのような原語を写したものかも判明していない。しかし，位置や原語が比定されている州のうちの２つから，唐が設置したこれらの州とトハーリスターンの行政区画との関係について興味深い点がうかがえる。それらの１つは，蘭城に置かれた鉢羅州である。この蘭（*lan[65]）は，所在地が不明なものの，前章の「まち」の項で引用したバクトリア語文書Ｆに見える「Lan」に比定されている［BD2：225b］。もう１つは，遲散州が置かれた悉蜜言城であり，この悉蜜言（*si̯ĕt-mi̯ĕt-ngi̯ɐn）は，前章「地区」の項で引用した文書Ｎ・Ｐ・Ｑに見える「Samingan」，すなわちサマンガーンに比定されている［Cf. Chavannes 1903：275］。つまり，これら２つの州は，トハーリスターンにおける「まち」，あるいは「地区」という行政区画に置かれたのである。このことは，十六都督府を設置するに際して，唐が現地の行政区画を認

64） 阿緩城をカラ=イェ・ザールに比定することについては，桑山 1985 を参照。「阿緩」は，『旧唐書』では「遏換」と記されているが，吉田豊によれば，この遏換の音はイスラーム時代の地理書に見える Ārhan と非常に近いという［吉田 1998：37；『旧唐書』：1649］。

65） 本稿では，中古漢語の再構形を Karlgren 1957 から引用している。

識していた可能性を示唆しているように見える。

さらに，『新唐書』地理志の十六都督府に関する記述には，現地の実情がある程度反映されていると考えられる事例が知られている。グーズガーンに設置された奇沙州都督府がそれであり，『新唐書』の記述は次の通り。

> 奇沙州都督府は護時犍國の遏蜜城に置かれた。治める州は2つ。沛隷州は漫山城に置かれた。大秦州は叡蜜城に置かれた[66]。

貨幣の銘文やバクトリア語文書をもとに，7世紀末頃のグーズガーンの状況を考察したSims-Williamsは，当時のグーズガーンでは3人の支配者が同時に異なる地域を支配していたと考えた［Sims-Williams 2011］。そして，吉田豊は，『新唐書』の記述に奇沙州，沛隷州，大秦州という3つの州が見えることが，Sims-Williamsの提示した状況に対応するとみなした［吉田 2013：50-51］。トハーリスターンの行政区画と関係する点で興味深いのが，奇沙州都督府が置かれた遏蜜城である。遏蜜（*at-mjět）は，イスラーム時代の資料に見えるAnbīr（現サレ・プル）に当たると言われており，このAnbīrはバクトリア語文書にも一度だけ現われる[67]。その文書とは，バクトリア紀元で「476年，新年の月の初め《698年5月31日》」の紀年を持つ文書Ssであり，「ここAmber（*αμβηρο*）で書かれた」と記されている［BD1^{2}: 96-97；BD3: pl. 66a］。ここに見えるAmberは，「まち」や「地区」といった行政区画を示す語を伴っていない。しかし，上述したように，「Lanのまち」が「蘭城」に，そして「Samingan地区」が「悉蜜言城」に比定されていることから考えると，バクトリア語文書中に見えるAmberは，「まち」あるいは「地区」に相当する行政区画であったと考えることができる。これはあくまでも遏蜜とAnbīr/Amberの比定が正しいという前提に立った推測であるが，これが正しいとすれば，先に筆者が示した，十六都督府設置の際に唐朝が在地の行政区画を認識していた，という推測を可能にする事例が1つ増すことになろう[68]。

66） 奇沙州都督府，以護時犍國遏蜜城置。領州二。沛隷州以漫山城置。大秦州以叡蜜城置。［『新唐書』: 1137］。

67） Cf. 吉田 2013: 51。グーズガーンの在地の支配者に献呈された『世界の諸境域』には，「Anbīrはグーズガーンの主邑（qasaba）である」と記されている［Ḥ‘Ā: 97; Minorsky 1970: xxii］。

68） バクトリア語（*αμβηρο*），あるいは中世ペルシア語（’nb’/’nbyy）の銘文を持つ貨幣が知られていることから，Amberでは貨幣が製造されていたと考えられている［Sims-Williams 2011: 65］。

ただし，ここで注意しなければならないのは，『新唐書』地理志における十六都督府についての記述が成立した背景である。稲葉穣の研究によれば，記述の背景には次のような状況が想定できる[69]。上に挙げた十六都督府一覧に見えるように，各都督府にはそれが置かれた「国」と「城」の名前が共に記されている。しかし，他の漢文資料やイスラーム時代の地理書には，これらの「国」と「城」の名前のうちのどちらか一方，多くの場合は国の名前しか対応するものを見いだせない。一方で，『大唐西域記』を見ると，ほとんどの場合，国の名前と都城の名前は区別されておらず，国の名前のみが挙げられている。このことから稲葉は，現地の実情により近いと思われる玄奘の記録と『新唐書』の記述とが異なっているのは，後者がある種の行政的操作の所産であったからではないかと推測した。さらに稲葉は，玄奘が通過した時には西突厥の宗主権下にあった現地の多くの小さな国やまちが，唐朝の羈縻支配下に入り，各地の主邑に置かれた都督府が管轄する州，縣，軍府に区分されたことにより，もともとその地方の主邑の名前とひとくくりで知られていたそれらの小さな国やまちに対して，新たに個別の名前が考案されたと考えたのである。

実際，先に挙げた月氏都督府管轄下の州の名前を見ると，藍氏州，大夏州，媯水州，粟特州など，その多くは古くから中国側で西方の地域や河川の名前として知られていたものであり，稲葉が考えるように，これらの名前が都督府設置に際して唐朝の側で考案されたものであることが分かる。このような机上の操作を伴って導入された十六都督府による統治が，実際にどれほどの実効性を伴っていたのかはほとんど分からない。しかし，上で見たように，蘭，悉蜜言，遏蜜という「城」の名前が，現地の行政区画である「まち」と「地区」の名前と対応する事例が存在することから，十六都督府設置の背景に王名遠が現地調査で得た行政区画の情報があったと考えることには大過ないと思われる。もちろん，これは十六都督府の管轄下にある多数の州のうちのわずか3つの州の状況から推測したものであり，それを全体の状況に敷衍することは難しいが，1つの可能性としてここに提示しておく。

ところで，前章で「まち」と「地区」について考察した際，ある時期を境に「まち」から「地区」への変化が起こったことを記した。その要因を特定することはできないが，本節の最後に，この変化が起きたのが十六都督府の設置された7世紀中頃と近いことを指摘しておきたい。何らかの外的要因があったのかもしれない。

69） 詳細はInaba forthcoming a，とりわけChapter 5(1）を参照。

3 アラブ=ムスリムの東方進出

さて，唐が阿史那賀魯の反乱を鎮圧し，西域諸国に十六都督府を設置する10年前，西方ではアラブ=ムスリムのホラーサーン進出が始まり，最終的に両勢力は751年タラスで激突することになる。ここでは，アラブの東方進出の略史を示した後，新出のアラビア語文書を利用し，アッバース朝の統治機構とトハーリスターンの行政区画との関係について考えてみたい[70]。

31/651-652年，バスラ総督アブド・アッラー・ブン・アーミルと，その副官アフナフ・ブン・カイスがホラーサーンへの進軍を開始し，アフナフの軍は，32/653年にマルウ・アル=ルードを占拠し，バルフへと進軍する。第一次内乱期になると，ヘラートやバルフで反乱が起きたが，それらはカイス・ブン・アル=ハイサムによって鎮圧された。41/661年には再びバスラ総督に任命されたアブド・アッラー・ブン・アーミルによって大規模なホラーサーン遠征が行われ，アラブのホラーサーン流入が始まる。この時，ホラーサーン総督府はメルヴに置かれた。

その後，アラブの勢力はアム・ダリア流域のアームル，ザンムを押さえるが，第二次内乱が始まるとその支配は弱まる。内乱期，イラク総督に登用されたハッジャージュ・ブン・ユースフは，ムハッラブ，次いでその息子ヤズィードを東方の失地回復に当たらせるが，シースターンでの反乱を契機に，ホラーサーンで大反乱が起きた。そこでハッジャージュは，85/704年，クタイバ・ブン・ムスリムをホラーサーン総督に任命する。

クタイバは反乱を終結させた後，ソグド方面にも遠征する。その後，バルフ方面で再び反乱が起きるが，これも90/710年にクタイバの軍によって鎮圧され，バルフ以西の地におけるアラブの支配は強固なものとなった。クタイバはその後も遠征活動を行い，93/711年にはサマルカンドを征服するにいたるが，95/714年にハッジャージュが死去したことによりその立場が揺らぎ，翌年，新たにスライマーンがカリフに即位すると，それに対して反乱を起こすが成功せず，部下に殺害されてしまう。

クタイバ没後もアラブの支配は維持されたが，720年代になるとマー・ワラー・アル=ナフル方面でテュルギシュによるアラブへの反撃が始まる。111/730年にホラーサーン総督となったジュナイド・ブン・アブド・アル=ラフマーンが一時的にソグドの地を回復するも，ジュナイドが死ぬと，トハーリスターンで大規模な反乱が起こり，サマルカンド

70） 以下に記す略史は，稲葉穣がH. A. R. Gibbと前嶋信次の研究をまとめたものを，さらに簡潔にしたものであり，詳細はそちらを参照［桑山 1998: 147-150］。併せて，G. Khanの記述も参考にした［Khan 2007: 13-14］。

も奪還された。118/736年，ホラーサーン総督に任命されたアサド・ブン・アブド・アッラーは，この事態に対処するため，ホラーサーン総督府をメルヴからバルフへと移す。アサドは，120/738年にグーズガーンでテュルギシュらの軍を撃破することに成功し，その結果，バルフ以東のトハーリスターンもアラブの強力な支配下に置かれることになった。

その後，アッバース家のdaʿī（教宣者）であったアブー・ムスリムがホラーサーンで蜂起し，アッバース革命が進むと，130/748年までにトハーリスターンもその影響下に入った。そして，133/751年，アブー・ムスリムが派遣したジヤード・ブン・サーリフが，タラスで高仙芝率いる唐軍を破ることになる。

4　アミールの管轄地とトハーリスターンの行政区画

上述したような経緯でアラブ=ムスリムの支配が中央アジアに及んだわけだが，近年，アッバース朝時代のトハーリスターンで書かれた32点のアラビア語文書が発見され，初期イスラーム時代の当地に関する貴重な情報がもたらされた[71]。これらの文書の大部分はハラージュの受領証であるが，その中にわずかではあるが，アッバース朝がトハーリスターンに設けた統治機構と，当地の行政区画との関わりを示すものが存在する。

まずは，147年ラビー・アル=アーヒル月《764年6/7月》に書かれ，Mīr ibn Bēkなる人物に発給されたハラージュの受領証（文書1）を見てみよう[72]。

> 慈悲深く慈愛あまねきアッラーの御名において。
> これは，Rōb地区，Siminjān，BWR’を管轄する，アミール’Ibrahīm ibn Yaḥyāの徴税官たちであるYūsuf ibn ‘Abd Allāhとal-Ḥasan ibn Warazānからの文書，（すなわち）Mīr ibn Bēk al-Bāmiyānīへの受領証である。我々は汝から144年のハラージュとして10ディルハムを，そして145年のハラージュとして10ディルハムを受け取った。我々はすでに汝からこれを受け取り，汝は我々に対するそれ（ハラージュの支払い義務）から自由になった。これは147年Rabīʿ al-Ākhir《764年6/7月》に書か

71）　詳細は註1）に挙げたG. Khanの文献を参照。

72）　Mīr ibn Bēkは，同時代のバクトリア語文書にも登場する。詳しくは，Sims-Williams 2010a : no. 253を参照。バクトリア語文書とアラビア語文書の記述に基づき，この人物を含む5世代分の家系図を復元することが可能だが，Khan 2007 : 22に記されている系図は誤っており，吉田2013 : 53に記載されているものが正しい。

れた。これは書かれた。[73]

ここには，アミールの徴税官たちが管轄する場所として，Rōb，Siminjān，BWR' の 3 つの地名が記されている。次に，発給者と受領者は文書 1 と同じであるが，異なる年度のハラージュの受領証である文書 2 を見てみよう。

慈悲深く慈愛あまねきアッラーの御名において。
これは，Madr と Rizm を管轄する，アミール Ibrāhīm ibn Yaḥyā ―― 神が彼の勝利を確固たるものとせんことを ―― の 2 人の徴税官である Yūsuf ibn ʻAbd Allāh と al-Ḥasan ibn Warazān からの文書，（すなわち）Mīr ibn Bēk への受領証である。我々は汝から，汝に課されている 146 年のハラージュとして 10 ディルハムを受け取った。我々は汝からこれらを受け取り，汝は我々に対するそれ（ハラージュの支払い義務）から自由になった。これは 147 年 Dhū al-Qaʻda の初日《764 年 12 月 30 日》に書かれた。[74]

ここでは，文書 1 と同じ徴税官の管轄地に，Madr と Rizm の名が見える。すなわち，両文書からは，2 人の徴税官，ひいてはアミール Ibrāhīm ibn Yaḥyā が管轄する地域の中に，Rōb，Siminjān，BWR'，Madr，Rizm があったことが分かる。これら 5 つの地名のうち，未比定の BWR' を除き，残る 4 つ全てが，バクトリア語文書で「まち」，あるいは「地区」として記される地名と一致していることは注目に値する。そして，すでに G. Khan が指摘しているように，ここに見えるアミールの管轄領域は，バクトリア語文書に見える Rob の khār の支配領域と重なっている［Khan 2007 : 21］。前章で見たように，バクトリア語文書から確認できる Rob の khār の支配領域は，複数の「まち」と「地区」を含むものであり，北は Samingan（サマンガーン），南は Malr/Madr（マドル），Kah（カフ

73)
بسم الله الرحمن الرحيم
هذا كتاب من يوسف بن عبد الله و الحسن بن ورزان عمال الامير ابرهيم بن يحيى على كورة الروب و سمنجان و بورا براة لمير بن بک
البامياني انا قبضنا منک من خراج سنة اربع و اربعين و مية عشرة درهم و من خراج سنة خمس و اربعين و مية عشرة درهم و قد قبضنا
منک ذلک و برئت الينا منه و كتب فى ربيع الاخرة سنة سبعة و اربعين و مية و كتب

［Khan 2007 : 92］

74)
بسم الله الرحمن الرحيم
هذا كتاب من يوسف بن عبد الله و الحسن بن ورزان عاملى الامير ابرهيم بن يحيى اعز الله نصره على مدر و رزم براة لمير بن بک انا
قبضنا منک مما صار عليک من خراج سنة ست و اربعين و مية عشرة دراهم قبضنها منک و برئت الينا منها و كتب لغرة ذو القعدة سنة
سبع و اربعين و مية

［Khan 2007 : 94］

マルド）辺りまでであった。

またここで注目したいのは，文書1において，徴税官が管轄する場所の1つ Rōb が「地区（kūra）」と記されていたことである[75]。10世紀の地理学者 al-Iṣṭakhrī の『諸道と諸国の書（*Kitāb Masālik al-Mamālik*）』とそのペルシア語訳に見える様々な用語を対応させた西村淳一の研究によれば，kūra といった地域区分用語は，アラビア語からペルシア語にそのまま取り込まれ，基本的に翻訳に際してペルシア語の単語に置き換えられないという。そして，西村はその要因として次のような状況を想定している。すなわち，アラブ=ムスリムは征服前の行政体系を踏襲し，当初は行政上の言語も在地のそれを用いていたが，やがて広大な領域を統治するための行政言語としてアラビア語を使用するようになり，地域区分用語もアラビア語で統一され，地理書でもペルシア語・アラビア語の区別なく地域区分用語はアラビア語を使用するようになったと［西村 2006：24-25］。ここで示された状況をトハーリスターンに当てはめると，イスラーム時代以前，バクトリア語で *þαρο/þαυρο*「まち」と呼ばれ，その後 *ωδαγο*「地区」へと変化した行政区画が，当地にアラブ=ムスリムの統治機構が確立された後は，アラビア語で kūra「地区」と呼ばれるようになったと推測することができよう[76]。

さらに，別のアラビア語文書には，「地区（kūra）」の中にあった行政区画，およびそれとイスラーム化以前の行政区画との関係を推測しうるものが存在する。まずは，先の文書1，および2と同じく Mīr ibn Bēk に発給された，異なる年度のハラージュの受領証（文書11）を見てみよう。

慈悲深く慈愛あまねきアッラーの御名において。

これは，Rizm と Madr を管轄する，アミール Ghālib ―― 神が彼に幸運をもたらさんことを ―― の徴税官である Bishr ibn ʻUmar から，Mīr ibn Bēk への受領証である。汝は，Yaskin の城砦と Ghandar において汝に課されている151年のハラージュとして，5ディルハムと3ダーナク，そしてそれに伴う一部（qisma）[77]として，1ディル

75） 文書1では，「地区」が単数形の kūra であり，複数形の kuwar でないことから，冒頭の Rōb だけが「地区」であったと考えられる。ただし，これらのアラビア語文書では，文法規則が厳密ではなく，例えば，文書1と2に見える2人の「徴税官」は，文書1では複数形の ʻummāl，文書2では双数形の ʻāmilay と記されている。よって，文書1では，単数形の kūra が用いられているものの，Rōb の後に続く Siminjān と BWRʼ も「地区」であった可能性は捨てきれない。このことについては，注81で後述する「城砦（qaṣr）」の事例も参照。

76） kūra という語については，EI^2 : KŪRA ; Yāqūt I : 36-37 ; Jwaideh 1959 : 56 を参照。

77） この qisma は補助的な税と考えられており，この補助税だけの受領証も存在する［Khan↗

ハムと4ダーナク半を私に送った。私は汝からそれを受け取り，汝は私に対するそれ（ハラージュの支払い義務）から自由になった。これは154年Ramaḍān《771年8/9月》に書かれた。[78]

ここには，Mīr ibn BēkがYaskinの城砦とGhandarにおいてハラージュを課されていたことが記されている。この文書では「城砦（qaṣr）」と記されるのはYaskinだけであるが，ハラージュを算定するための測量について記した文書24を見ると，Ghandarも「城砦（qaṣr）」であったことが分かる。

慈悲深く慈愛あまねきアッラーの御名において。
これは，Ziyād ibn Sinān，Kātib ibn Naṣr，そしてmukhtār[79]であるKhūnから，Malik ibn Zundādへの文書である。我々は汝に対して，Ghandarの城砦において，2 qafīzの耕作されていない果樹園（karm），および6 qafīz半の土地（'arḍ）を測った。Naṣrの被護者（maulā）については，3 qafīz半の果樹園，および2 qafīzの土地（を測った）。Qarwāl ibn Mīrについては，3 qafīz半の果樹園，および1 jarībと3 qafīzの土地（を測った）。これは154年のRajab《771年5/6月》に書かれた。[80]

これら2点の文書から，Mīr ibn Bēkが，Yaskin，およびGhandarという「城砦（qaṣr）」においてハラージュを課されていたことが分かる[81]。また，先に挙げた文書11

↘ 2007 : 31]。

78）
بسم الله الرحمن الرحيم
هذه براة من بشر بن عمر عامل الامير غالب اصلحه الله على رزم و مدر لمير بن بک انک اديت الى مما صار عليک فى قصر يسكن و
غندر من خراج سنة احدى و خمسين و ماية خمسة درهم و ثلثة دونيق و من القسمة معها درهم و اربعة دونيق و نصف قبضت ذلک منک
و برئت الى منها و كتب فى رمضان سنة اربع و خمسين و ماية

［Khan 2007 : 112］

79） G. Khanは，このmukhtārという称号を持つ役人がエジプトの税務行政に導入されるのが，トハーリスターンのアラビア語文書よりも100年遅い9世紀であることから，東方の制度がエジプトで採用された可能性を指摘している［Khan 2007 : 42］。

80）
بسم الله الرحمن الرحيم
هذا كتاب من زياد بن سنان و كتب بن نصر و خون المختار لملك بن زونداد انا مسحنا عليك فى قصر غندر من الكروم الغامرة قفيزتين و
ارض ستة اقفزة و نصف و لمولى نصر من الكروم ثلثة اقفزة و نصف و ارض قفيزتين و لقاروال بن مير من الكروم ثلثة اقفزة و نصف
و ارض جريب و ثلثة اقفزة و كتب فى رجب سنة اربع و خمسين و مية

［Khan 2007 : 138］

81） 文書11では，「城砦」という語が複数形のquṣūrではなく，単数形のqaṣrであることから，アラビア語文法的には，Yaskinのみが「城砦」であり，Ghandarはそうでないということになる。しかし，文書24で見たように，実際にはGhandarも「城砦」であった。

以外にも，Mīr の兄弟である Bāb ibn Bēk，そして文書 24 にも登場する Mīr の息子 Qārwāl ibn Mīr へ発給された，Yaskin と Ghandar におけるハラージュの受領証が存在することから，この一族はこれらの場所に耕作地を有していたと考えられる［Khan 2007 : 122-135］。Yaskin と Ghandar の正確な位置は不明だが，Madr（マドル）と Rizm（カフマルドを内包する地域）を管轄する徴税官が発給した文書 11 にその名が見えることから，マドル，あるいはカフマルドの近郊にあった土地ということになる。

さて，このアラビア語文書に見える Yaskin と Ghandar は，それぞれバクトリア語文書に見える Askin（*ασκινο*）と Gandar（*γανδαρο*）に比定されている［Khan 2007 : 20-21］。この Askin と Gandar が，バクトリア語文書中でどのような行政区画であったのかが分かれば，アラビア語文書の「城砦（qaṣr）」との対応関係を知ることができるが，残念ながらバクトリア語文書中にはそのことが明記されていない。しかし，Gandar に関しては，そこで書かれた土地の購入契約書（文書 W）が存在し，若干の推測を行うことができる。

> 525 年，Pusig 月《747 年 8/9 月》，（この）封印文書，（すなわちこの）購入契約書は書かれた。ここ Gandar で（下略）[82)]

前章で見たように，バクトリア語の契約文書の冒頭は全てこのような文言であり，それらの文書は「まち」「地区」「城砦」「街区」のいずれかの行政区画において書かれたものであった。よって，この Gandar もいずれかの行政区画にあたることは確実であろう。アラビア語の Yaskin と Ghandar が「城砦（qaṣr）」であることから，バクトリア語の Askin と Gandar も「城砦（*λιζο*）」であったと推測することができる。しかし，これは単に語義的に共通するというだけで，何ら確実性を伴う推測ではないため，ここでは可能性の 1 つとして提示するに留めておきたい[83)]。

いずれにしても，これまで述べたことから判断して，アッバース朝は，イスラーム時代以前の在地支配者の支配領域を引き継ぐ形でそこにアミールを任命し，そのアミールやアミールのもとにいた徴税官は，イスラーム時代以前から存在した行政区画に基づき統治を行っていた，と考えることに大きな誤りはないだろう[84)]。

---

82) *αχþονο φˈκˈεˈ μαυο ποσιγο καλδο ναβιχτο μολραγο χιρσοβωστιγο μαλαβο γανδαρο*［BD1^2 : 126-127 ; BD3 : pl. 92-93］

83) ちなみに，西村の研究によれば，al-Iṣṭakhrī『諸道と諸国の書』のペルシア語訳では，アラビア語の qaṣr は，ペルシア語の kūshk に訳されている［西村 2006 : 19］。

84) アッバース朝の駅逓長官であった Ibn Khurdādhbih が著した『諸道と諸国の書（*Kitāb al-Masālik wa al-Mamālik*）』，および 9-10 世紀の地理学者 Ibn al-Faqīh が著した『諸国の↗

お わ り に

トハーリスターンという地域名の指示範囲，およびその地勢を確認した上で，トハーリスターンの行政区画構造について考察した。本稿で明らかになったことは，次の通りである。まず，トハーリスターンには，「まち」と「地区」という行政区画があった。両者には時間的な差があり，7世紀に「まち」から「地区」への変化が起こったと考えられる。また，Rob の khār の支配領域に限っては，実際の地勢と照らし合わせ，「まち」と「地区」がそれほど大きな範囲を覆うものではなかった可能性を示した。そして，これらの行政区画の中にあったのが，「城砦」と「街区」であった。「城砦」については，オアシス都市におけるクヘンディズと比較すると共に，クシャーン朝期のスルフ・コタル遺跡を参考にして，おおよその規模についても言及した。「街区」については，Rob の「まち」に複数の「街区」が存在していたことが判明したが，残された資料の少なさから，その詳細を明らかにすることができなかった。

さらに本稿では，トハーリスターンを支配した勢力が設けた統治機構と，在地の行政区画構造との関係について，当地が唐，およびアッバース朝の支配下に組み込まれた時代を対象として考察を行った。その結果，これら両勢力がこの地に統治機構を設けるに際して，在地の行政区画構造を認識し，利用していた可能性を示すことができた。

しかし，本稿で扱いきれなかった問題も少なくない。まずは，トハーリスターンにおける地域的な差異が挙げられる。グーズガーンで書かれた文書には，Rob とカダグスタンの行政区画とは異なる状況を示すものがあることに言及したが，このような地域差を行政地理とは異なる側面からも明らかにしてゆかねばならないだろう。なぜなら，バクトリア語文書が書かれた各地の地域性を明らかにすることは，それらの地に展開した諸勢力のより具体的な動向の解明に繋がるからである。そして，そのような地域性を考察する際には，本稿では全く利用することができなかった近現代に行われた人文地理研究の成果も利用しなければならないだろう。また，イスラーム時代の資料に関しては，ペルシア語やアラビア語の地理書に現れる地域区分用語を精査し，バクトリア語文書に見

↘ 書（*Kitāb al-Buldān*)』には，ターヒル朝の ʻAbdallāh ibn Ṭāhir が 211-212/826-828 年に課されていた税額を詳細に記した箇所があり，そこには，トハーリスターンの諸地区（kuwar）の1つとして，Rōb と Siminjān が一組で表されている［Ibn Khurdādhbih : 36-37 ; Ibn al-Faqīh : 630］。これも，Rob の khār の支配領域がイスラーム時代以降に引き継がれた傍証となるかもしれない。

られる行政区画との対応関係をさらに詳しく検討しなければならない。

このように残された課題は多いが，それらを１つ１つ克服してゆくことで，今後もトハーリスターンの歴史に関わる種々の問題を少しずつ明らかにしてゆきたい[85)]。

資料・略号

『漢書』：班固（撰）『漢書』北京：中華書局，1987.
『魏書』：魏収（撰）『魏書』北京：中華書局，1974.
『旧唐書』：劉昫 等（撰）『旧唐書』北京：中華書局，1975.
『後漢書』：范曄（撰）『後漢書』北京：中華書局，1987.
『三国志』：陳寿（撰）『三国志』北京：中華書局，1982.
『史記』：司馬遷（撰）『史記』北京：中華書局，2013.
『新唐書』：欧陽修，宋祁（撰）『新唐書』北京：中華書局，1975.
『北史』：李延寿（撰）『北史』北京：中華書局，1987.
BD1 : Sims-Williams 2000
BD1^2 : Sims-Williams 2012a
BD2 : Sims-Williams 2007
BD3 : Sims-Williams 2012b
EI^2 : *Encyclopædia of Islam*, 2nd edition
EIr : *Encyclopædia Iranica*
Ḥ'Ā : M. Sutūda ed. *Ḥudūd al-'Ālam*, Tehran : University of Tehran Press, 1962.
Ibn al-Faqīh : Yūsuf al-Hādī ed. *Kitāb al-Buldān*, Beirut : Alam al-Kotob, 1996.
Ibn Khurdādhbih : M. J. de Goeje ed. *Kitāb al-Masālik wa al-Mamālik*, Bibliotheca Geographorum Arabicorum VI, Leiden : E. J. Brill, 1967.
Yāqūt : *Mu'jam al-Buldān*, 7 vols., Beirut : Dar Sader Publishers, 1957.

参 考 文 献

Adamec, L. W.（1979）*Mazar-i-Sharif and north-central Afghanistan*. Historical and Political Gazetteer of Afghanistan vol. 4, Graz : Akademische Druck- und Verlagsanstalt.
合阪　學（訳注）（1998）『地中海世界史』京都：京都大学学術出版会.
Alram, M., D. Klimburg-Salter, M. Inaba & M. Pfisterer（eds.）（2010）*Coins, Art and Chronology II. The First Millennium C.E. in the Indo-Iranian Borderlands*, Wien : Verlag der Österreichischen

---

85）本稿は2014年１月に龍谷大学に提出した課程博士論文のうち，いずれも書き下ろしであった序章，および第４章の一部を，大幅に加筆・修正したものである。論文の審査に際して，濱田正美先生，近藤真美先生，稲葉穣先生，吉田豊先生から多くのご教示を賜った。また，本稿を執筆するに当たって，改めて稲葉穣先生，吉田豊先生，そして岩井俊平氏から数々の助言を頂いた。記して心から感謝の意を表したい。

Akademie der Wissenschaften.
Alram, M. & M. Pfisterer（2010）“Alkhan and Hephthalites Coinage,” Alram, M. et. al. 2010, 13–38.
Ball, W.（ed.）（1982）*Archaeological Gazetteer of Afghanistan*, Paris : Édition Recherche sur les civilisations.
de Blois, F.（2008）“Du nouveau sur la chronologie bactrienne post-héllenistique,” *Comptes rendus de l'Académie des Inscriptions et Belle-Lettres* 2006/2, 991–997.
de Blois, F.（2013）“Bactria, Bāxδī-, Balk,” Тохтасьева, С. Р. & П. Б. Лурье eds. *Commentationes Iranicae. Сборник статей к 90-летию Владимира Ароновича Лившица*, Санкт-Петербург : Нестор-История, 268–271.
Bosworth, C. E. & M. Ashtiany（tr.）（2011）*The History of Beyhaqi*（*The History of Sultan Mas'ud of Ghazna, 1030–1041*）, 3 vols., Boston/Washington : Ilex Foundation/Center for Hellenistic Studies.
Chavannes, É.（1903）*Documents sur les Tou-kiue (Turcs) occidentaux*, St. Petersburg : Commissionnaires de l'Académie impériale de sciences.
Cribb, J.（2010）“The Kidarites, the Numismatic Evidence,” Alram, M. et al. 2010, 91–146.
Gershevitch, I.（1979）“Nokonzok's well,” *Afghan Studies* 2, 55–73.
Göbl, R.（1984）*System und Chronologie der Münzprägung des Kušānreiches*, Wien : Verlag der Österreichischen Akademie der Wissenschaften.
Gökenjan, H. & I. Zimonyi（2001）*Orientalische Berichte über die Völker Osteuropas und Zentralasiens im Mittelalter. Die Ǧayhānī-Tradidion (Ibn Ruista, Gardīzī, Ḥudūd al-ʻĀlam, al-Bakrī und al-Marwazī)*, Wiesbaden : Harrassowitz Verlag.
Grenet, F.（2006a）“Nouvelles données sur la localisation des cinq *Yabghus* des Yuezhi. L'arrière-plan politique de l'itinéraire des marchands de Maès Titianos,” *Journal Asiatique* 294/2, 325–341.
Grenet, F.（2006b）Review of Gyselen 2002, *StIr* 35/1, 144–148.
Grenet, F. & É. de la Vaissière（2002）“The last days of Panjikent,” *Silk Road Art and Archaeology* 8, 155–196.
Gyselen, R.（1989）*La géographie administrative de l'empire Sassanide*, Paris : Groupe pour l'étude de la civilisation du Moeyn-Orient.
Gyselen, R.（2002）*Nouveaux matériaux pour la géographie historique de l'empire Sassanides : Sceaux administratifs de la collection Ahmad Saeedi*, Paris : Association pour l'avancement des études iraniennes.
Gyselen, R.（2003）“La reconquête de l'est iranien par l'empire sassanide au VIe siècle d'après les sources «iraniennes»,” *Arts Asiatiques* 58, 162–167.
飯尾都人（訳）（1994）『ギリシア・ローマ世界地誌』（I・II）東京：龍溪書舍.
稲葉　穰（1990）「セルジューク朝と後期ガズナ朝 ―― その國境地帯について ――」『東方学報』62, 637–673.
稲葉　穰（2003）「アフガニスタンにおけるハラジュの王国」『東方学報』76, 382–313.
Inaba, M.（forthcoming a）“From Caojuzha to Ghazna/Ghaznīn : Early Medieval Chinese and Muslim Descriptions of Eastern Afghanistan,” *Journal of Asian History*.
Inaba, M.（forthcoming b）“Between Zābulistān and Gūzgān : A study on the early Islamic history of Afghanistan,” *Journal of Inner Asian Art and Archaeology*.
伊藤義教（1974）『古代ペルシア ―― 碑文と文学 ――』東京：岩波書店.

岩井俊平（2003）「ポスト・クシャーン期バクトリアの土器編年」『西アジア考古学』4, 41-54.
岩井俊平（2004）「トハーリスターンにおける地域間関係の考古学的検討」『西南アジア研究』60, 1-18.
岩井俊平（2005）「ヒンドゥー・クシュ南北における土器組成の比較」『西アジア考古学』6, 29-39.
岩井俊平（2014）「バーミヤーン地域におけるスキンチの導入」『仏教学研究』70, 79-101.
Jwaideh, W.（tr.）（1959）*The Introductory Chapters of Yāqūt's Mu'jam al-Buldān*, Leiden : E. J. Brill.
Karlgren, B.（1957）"Grammata Serica Recensa," *Bulletin of the Museum of Far Eastern Antiquities* 29, 1-332.
Khan, G.（2007）*Arabic Documents from Early Islamic Khurasan*, London : The Nour Foundation.
桑山正進（1984）「バーミヤーン私注」『建築史学』2, 127-150（桑山 1990 : 411-431 に改変再録）.
桑山正進（1985）「トハーリスターンのエフタル，テュルクとその城邑」日本オリエント学会（編）『三笠宮殿下古希記念オリエント学論集』，東京：小学館，140-154（桑山 1990 : 399-411 に改変再録）.
桑山正進（訳注）（1987）『大唐西域記』（大乗仏典中国・日本篇 9）東京：中央公論社.
桑山正進（1989）「書評：le Berre 1987」『オリエント』32/1, 152-156.
桑山正進（1990）『カーピシー=ガンダーラ史研究』京都：京都大学人文科学研究所.
桑山正進（編）（1998）『慧超往五天竺國傳研究』京都：臨川書店.
de la Vaissière, É.（2010）"Last Bactrian Kings," Alram, M. et al 2010, 213-218.
le Berre, M.（1987）*Monuments Pré-Islamique de l'Hindukush Central*, Mémoires de la Délégation Archéologique Française en Afghanistan XXIV, Paris : Édition Recherche sur les civilisations.
Lee, J. & N. Sims-Williams（2003）"The antiquities and inscription of Tang-i Safedak," *Silk Rod Art and Archaeology* 9, 159-184.
Lerner, J. A., A. Saeedi & N. Sims-Williams（2009）"The Bactrian Sealings in the A. Saeedi Collection（London）," Gignoux, Ph., Ch. Jullien & Fl. Jullien eds. *Trésors d'Orient. Mélanges offerts à Rika Gyselen*. Paris : Association pour l'avancement des études iraniennes, 211-235.
Lerner, J. & N. Sims-Williams（2011）*Seals, Sealings and Tokens from Bactria to Gandhāra*（*4th to 8th century CE)*, Studies in the Aman ur Rahman Collection vol. 2, Wien : Verlag der Österreichischen Akademie der Wissenschaften.
le Strange, G.（1905）*The Lands of the Eastern Caliphate. Mesopotamia, Persia, and Central Asia from the Moslem conquest to the time of Timur*, Cambridge : Cambridge University Press.
Marquart, J.（1901）*Ērānšahr nach der Geographie des Ps. Moses Xorenac'i*, Berlin : Weidmannsche Buchhandlung.
松田寿男（1970）『古代天山の歴史地理学的研究（増補版）』東京：早稲田大学出版部.
Melzer, G.（2006）"A Copper Scroll Inscription from the Time of the Alchon Huns," Braarvig, J. *et al*. eds. *Manuscripts in the Schøyen Collection. Buddhist Manuscripts 3*, Oslo : Hermes Academic Publishing, 251-278.
Minorsky, V.（tr.）（1970）*Ḥudūd al-'Ālam. 'The Regions of the World'*, 2nd ed., Cambridge : E. J. W. Gibb Memorial Trust.
宮本亮一（2012）「バクトリア語文書中に見えるカダグスタンについて」『東方学報』87, 448-413.
宮本亮一（2014）『バクトリア史研究』学位申請論文，龍谷大学（http : //hdl.handle.net/10519/5671 最終アクセス 2015 年 5 月 29 日）.
宮本亮一・岩井俊平（2013）「書評：Alram et al. 2010」『西南アジア研究』78, 106-126.

水谷真成（訳注）（1971）『大唐西域記』（中国古典文学大系 22）東京：平凡社.
森谷公俊（2011）「ディオドロス・シクロス『歴史叢書』第一七巻「アレクサンドロス大王の歴史」訳および註（その三）」『帝京史学』27, 135-212.
中務哲郎（訳）（1986）『プトレマイオス地理学』東京：東海大学出版会.
Naveh, J. & S. Shaked（2012）*Aramaic Documents from Ancient Bactria (Fourth Century BCE.) from the Khalili collections*, London : The Khalili Family Trust.
西村淳一（2006）「イスタフリー著アラビア語地理書『諸道と諸国の書』とそのペルシア語訳の比較研究」『史淵』143, 15-41.
大牟田章（訳注）（1996）『アレクサンドロス東征記およびインド誌』（本文篇・註釈篇）東京：東海大学出版会.
ルトヴェラゼ・エドヴァルド（訳：帯谷知可）（2006）『アレクサンドロス大王東征を掘る』東京：日本放送出版協会.
Schlumberger, D., M. le Berre & G. Fussman（1983）*Surkh Kotal en Bactriqne I*, Mémoires de la Délégation Archéologique Française en Afghanistan XXV, Paris : De Boccard.
Schmitt, R.（2009）*Die altpersischen Inschriften der Achaimeniden*, Wiesbaden : Reichert Verlag.
Shaked, S.（2004）*Le satrape de Bactriane et son gouverneur. Documents araméens du IV*[e] *s. avant notre ère provenant de Bactriane*, Paris : De Boccard.
Sims-Williams, N.（1997）*New Light on Ancient Afghanistan : The Decipherment of Bactrian*, London : School of Oriental and African Studies.
Sims-Williams, N.（2000）*Bactrian Documents from Northern Afghanistan I : Legal and Economic Documents*, Oxford : Oxford University Press.
Sims-Williams, N.（2004a）"Nouveau documents bactriens du Guzgan," *Comptes rendus de l' Académie des Inscriptions et Belle-Lettres* 2002/3, 1047-1058.
Sims-Williams, N.（2004b）"The Parthian Abstract Suffix *-yft*," Penney, J. H. W. ed. *Indo-European Perspectives*, Oxford : Oxford University Press, 539-547.
Sims-Williams, N.（2005）"Bactrian Legal Documents from 7th-8th century Guzgan," *Bulletin of the Asia Institute* 15, 9-29.
Sims-Williams, N.（2007）*Bactrian Documents from Northern Afghanistan II : Lettersn and Buddhist Text*, London : The Nour Foundation.
Sims-Williams, N.（2008）"The Sasanians in the East : A Bactrian archive from northern Afghanistan," Curtis, V. S. & S. Stewart eds. *The Sasanian Era*（The Idea of Iran vol. 3）, London/New York : I. B. Tauris, 88-102.
Sims-Williams, N.（2010a）*Bactrian Personal Names*. Iranisches Personennamenbuch II/7, Wien : Verlag der Österreichischen Akademie der Wissenschaften.
Sims-Williams, N.（2010b）"Two Late Bactrian Documents," Alram, M. et al 2010, 203-211.
Sims-Williams, N.（2011）"The Bactrian ear of 233 C. E. —some numismatic considerations," Shanghai Museum ed. *Proceedings of the Symposium on Ancient Coins and the Culture of the Silk Road*（絲綢之路古國錢幣暨絲路文化國際學術研討會論文集）, Shanghai : Shanghai Shuhua Chubanshe（上海書畫出版社）, 62-74.
Sims-Williams, N.（2012a）*Bactrian Documents from Northern Afghanistan I : Legal and Economic Documents*（revised edition）, London : The Nour Foundation.
Sims-Williams, N.（2012b）*Bactrian Documents from Northern Afghanistan III : Plates*, London : The

Nour Foundation.

Sims-Williams, N.（2012c）“New Light on Ancient Afghanistan : The Decipherment of Bactrian,” Hansen, V. ed. *The Silk Road : key papers vol. I*, Leiden/Boston : Global Oriental, 95-114.

Sims-Williams, N.（2012d）“Bactrian Historical Inscriptions of the Kushan Period,” *The Silk Road* 10, 76-80.

谷栄一郎・上村健二（訳注）（2003）『アレクサンドロス大王伝』京都：京都大学学術出版会.

Tremblay, X.（2003）“La résurrection du Bactrien : à propos des *Bactrian Documents*,” *Indo-Iranian Journal* 46/2, 119-133.

内田吟風（1965）「唐高宗勅撰西域志校録」『研究』35, 140-149.

Vondrovec, K.（2014）*Coinage of the Iranian Huns and their Successors from Bactria to Gandhāra*（*4th to 8th century CE*）, 2 vols., Wien : Verlag der Österreichischen Akademie der Wissenschaften.

吉田　豊（1992）「バクトリア語」亀井孝・河野六郎・千野栄一（編）『言語学大辞典』3, 東京：三省堂, 111-115.

吉田　豊（1998）「Sino-Iranica」『西南アジア研究』48, 33-51.

吉田　豊（1999）「中央アジアオアシス定住民の社会と文化」間野英二（編）『アジアの歴史と文化』8 中央アジア, 東京：同朋舎, 42-54.

吉田　豊（2013）「バクトリア語文書研究の近況と課題」『内陸アジア言語の研究』28, 39-65.

Yoshida, Y.（2003）“Review of Sims-Williams 2000,” *Bulletin of the Asia Institute* 14, 154-159.